

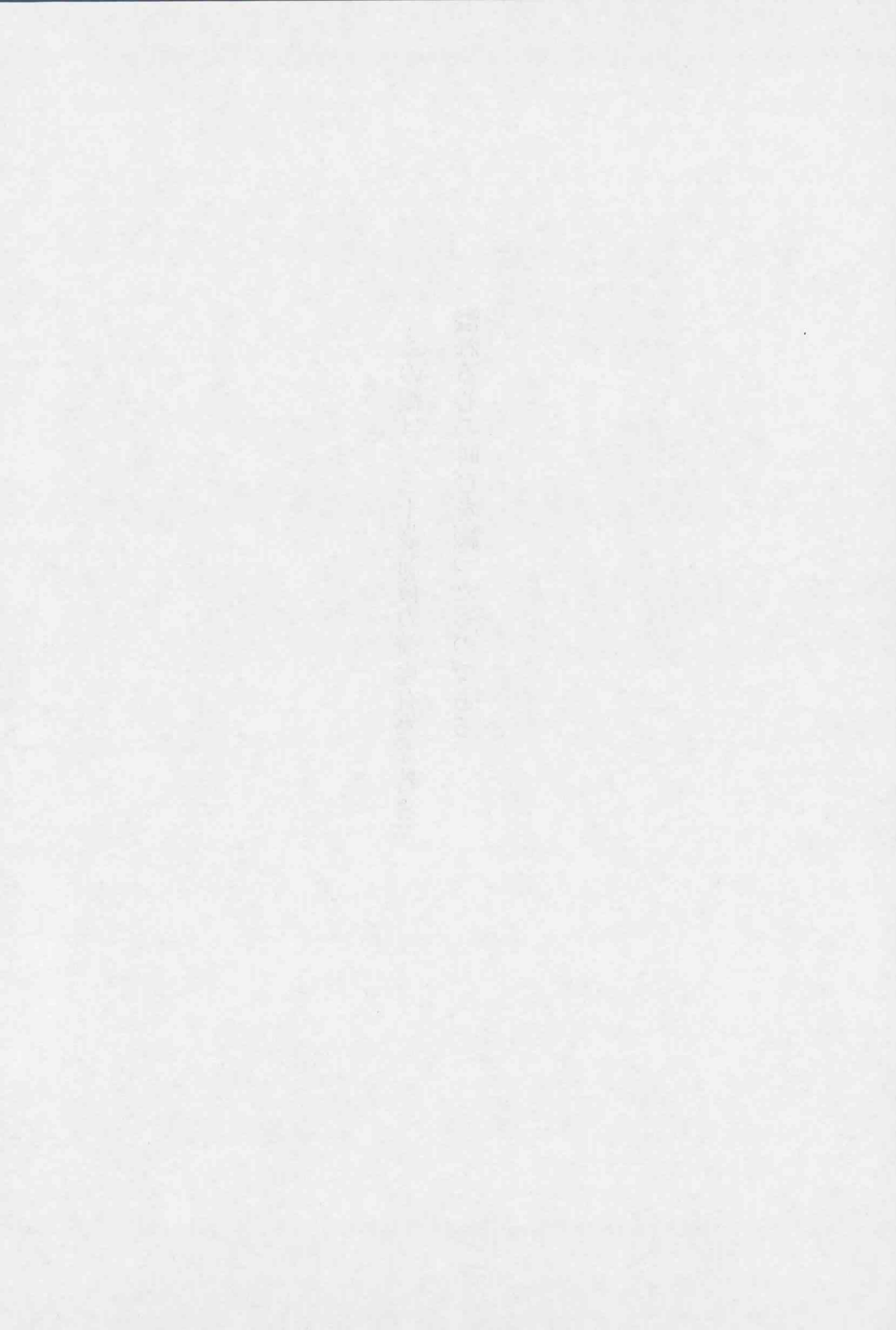
產政塾

X

產政塾

壽山集

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである。



目次

●産政塾Ⅹの発刊によせて

(財)中部産業・労働政策研究会

植本俊一

●コミュニケーション

アイシン労働組合 石川輝彦

●前向きに生きよう

トヨタ車体(株) 奥田竜太郎

●私と英語

(株)デンソー 糟谷道広

●かわつちやいけないモノは、かわつちやいけない!!

松坂屋労働組合 門孝裕

●きつかけ

中部電力(株) 川上茂浩

●「もう少しゆつくり」がいい

アイシン精機(株) 小坂好伸

33

25

19

13

7

1

● 最近思うことと今後の目標 43

豊田市役所 近藤 理史

● まだ見ぬ我が子供と共に 49

日本特殊陶業(株) 杉本 道男

● 『パパ不公平』 55

トヨタ車体労働組合 鈴木 亨

● ケース・バイ・ケース 61

アラコ(株) 鈴木 康紀

● 親 67

デンソー労働組合 高橋 勝将

● 『自分に誇れること』 75

トヨタ自動車(株) 丹下 隆吉

● 最近思う事 83

アスモ(株) 徳増 達生

● 半生を振り返る 91

丸栄労働組合 西井 俊哉

● 雑談 99

名古屋鉄道(株) 船間 淳也

● 大人になるための心得	全トヨタ労働組合連合会	松田 斉	105
● 『殻の外』へ	豊田合成(株)	武藤 成洋	111
● 「チェンジ」	トヨタ自動車労働組合	安田 孝治	115
● 「青春時代」	フタバ産業(株)	矢田 勝弘	121
● 考える幸福	名古屋大学	常 兆	129
● 二〇〇九年産政塾の二〇〇年を振り返って（二〇年後の産政塾）	中部産政研	丹羽 研次	139
● 産政塾活動記録			147

産政塾Xの発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、この度第十期を終えました。

産政塾は、異業種の若者二十名にご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。

セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルではなく、参加したメンバーが自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出向して体験や教えを請うという活動を通して、学ぼうとするものであります。

また、産政塾は異業種の人達の集りであり、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を超えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーを生み出そうとするものであります。

こうした活動を通して、参加者は自らの考えを検証し、自分自身の存在や役割を自覚するという、言うならば自らを磨く道場といったものであります。

今回、産政塾に参加した人達は三十才前後の若者二十名であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集りになりました。

人間形成の基本の時期は青春期であるといわれておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいといえます。一応仕事にも慣れ自分で判断できる能力もできつつある。精神的にも肉体的にも充実しており、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活動する時期であります。

こうした若者達の集りである産政塾は、約一年間に亘ってお互いが夢を語り、自らの企画によって

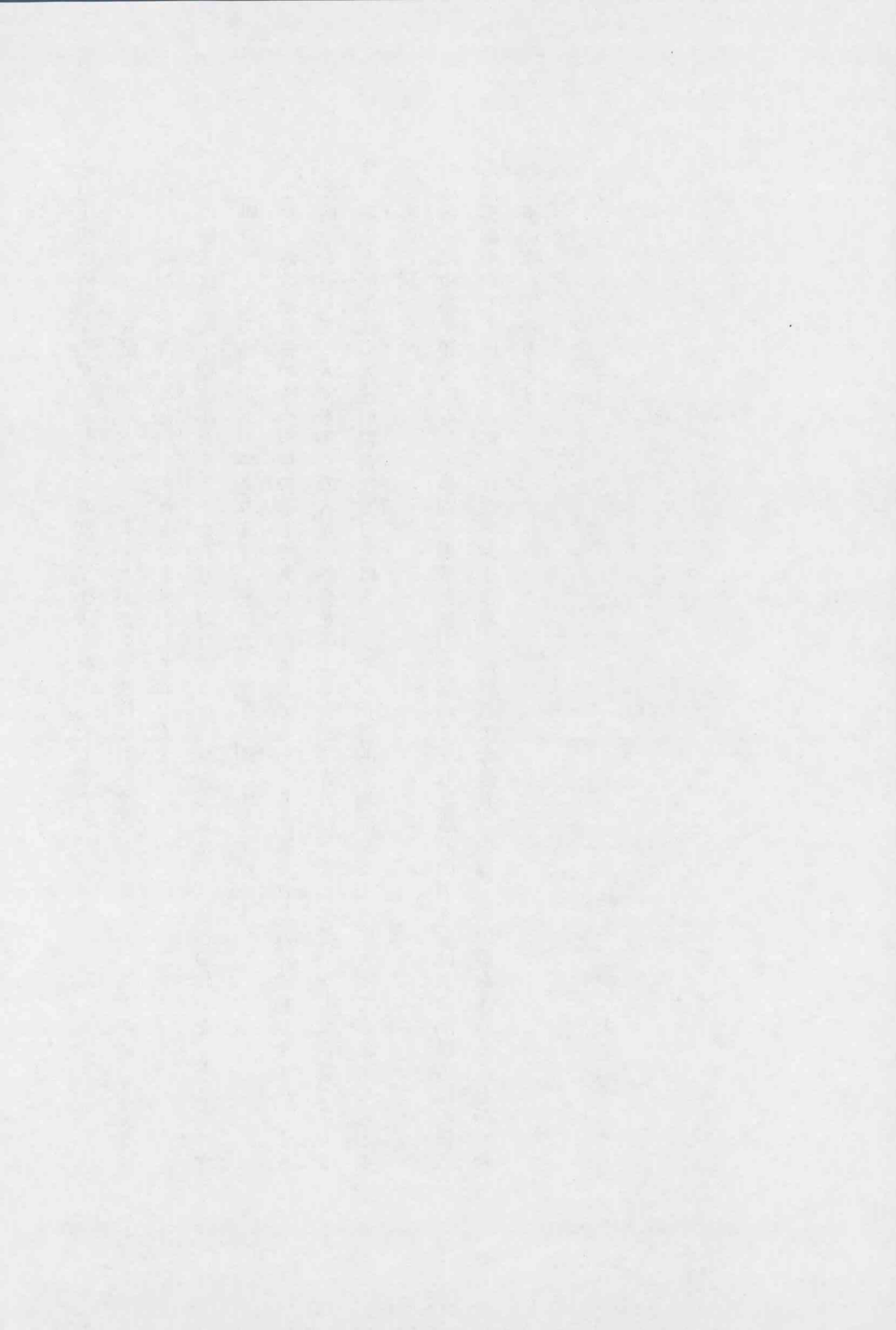
その実践に情熱を注ぎ、そしてこの度セミナーを終了いたしました。

このセミナーを通じて、参加者一人一人が新しい次代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第十期生がセミナーを通して得た様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。

また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加してもらうのは限られた人達であります。こうした冊子を通して一人でも多くの人達の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の人達の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

なお、産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ関係各位の皆さんに感謝を申し上げると共に、産政塾および塾生に対して今後共ご指導・ご声援を賜わることができれば誠に幸いです。



コミュニケーション



アイシン労働組合

石川 輝彦

〔プロフィール〕

いしかわ てるひこ (35歳)

- 1964年 6月 愛知県碧南市生まれ
 - 1983年 4月 アイシン精機株式会社 入社
 - 1984年 4月 西尾工場に配属
 - 1996年 9月 労働組合専従 現在に至る
- 〈家族〉 妻、長女 (10歳)・次女 (8歳)
- 〈趣味〉 キャンプ・スキー

(最近では、もっぱら家族とばかりで)

まえがき

「書かなければ・・・」とは思いつつ、ついに『督促状』が来てしまった。「この仕事が終わったら書き出そう」その仕事が終われば終わったで、面倒な（？）ものは後回しにしてしまおう。本当に良い（？）性格だ。

そもそも、一月の第十期産政塾開校式にこの面倒な（？）塾誌のことは、事務局の丹羽さんの発言で頭の中から吹っ飛んでいたのである。

しかし、九月の開校式では「やはり、書いていただく事になった。」と聞かされた時は、愕然とした。文才もなく、趣味もない私に、何が書けるんだろうか。こんな不安が私の頭を過ぎる。しかし、このままにしておいても、第十期の塾生のみんなに迷惑がかかる。その前に事務局の丹羽さんに要らぬ心配をかけてしまおう。このままでは、第八回の産政塾に参加（企画？）もできない。あれや、これや考えながらも、今思っている事を書き並べようと開き直り、キーボードを叩くことにする。

会社でのコミュニケーション

私は、働きはじめてから、もうすでに勤続十六年になる。この十六年間、何をやってきたのだろうか。一度、この十六年間を振り返りながら考えたいと思う。

入社一年目、私は高等学園に入った。我社のこの時代の高等学園は、工業高校出身（私は、高校三年間、工業高校で勉強も程々に楽をしていたのである。）の男ばかりで、全員が寮で生活していたので

ある。生まれも育ちもこの三河の私が、なぜ寮に入るのか、疑問に思った事もある。しかし、この一年間でしっかりと学んだ。何を学んだのか。言うまでもない。社会の規律、厳しき。そして、チームで、いや学園全体で力を合わせる事。すなわち、コミュニケーションである。

この高等学園を卒園後、私は現場に配属となった。配属先は、比較的年齢が近い先輩達のいる職場だった。班長さんも私より十歳年上の二十九歳、独身である。その班長さんのモットーは、『よく働き・よく遊ぶ』。仕事で失敗すればその場で怒り、上手く行けば一緒に喜び、また週末になれば遊びの話を持ち掛けてる、本当に自分のモットーそのままなのである。

その班長さんからも、いろいろなことを学んだと思う。特に仕事面では、その一つひとつを伝授してくれる。その伝授方法は、まずはキーとなることを教えてくれる。そして、私の思うままにさせてくれる。当然、失敗をしそうになれば、すぐに厳重注意が入る。私は、実際に触っているので、早く身に付く。一度、何故こんなに教えてくれるのか疑問に思っていた事がある。答えは、「早く一人前になって、俺の右腕になって欲しい。」と言う。私は、感激した。「早く一人前になって、班長さんに恩返しだ。」と思った。しかし、班長さんの答えを裏返せば、「早く、俺を楽にさせろ！」だったのである。そのことに気付いたのは、数年後であった。

そんな答えの裏返しに気付いた頃は、私も二十人程度の部下を持つ事になった。「早く、楽をしたい！」という思いの一心から、部下の育成には心がけた。私の教えられたように教え込む。この様にして、騙された(?) 部下も数人おり、今ではいっばしに部下を持っている。その部下も、また騙されているのだらう。

しかし、この事が、最近の社会に欠如している『技能の伝授・伝承』なのではないのだろうか。悪い時はその場で叱る。逆に、良い時はその場でしっかりと誉め、一緒に喜ぶ。こういった職場内の『コミュニケーション』が欠けているのではないかと思うのである。

それでは、違った角度から『コミュニケーション』を考えたいと思う。最近では、どの会社でも「成果主義」または、「実力主義」を取り沙汰されている。しかし、この「成果主義」だとか、「実力主義」とは、会社にとってどんな能力を持ち合わせた人を言うのだろうか。確かに、会社にとっては、「専門能力を持ち、頭の切れる人材」は、必要不可欠なものだろう。だが、会社というところは、縦のチーム、横のチームで動いているのではないのだろうか。チームプレーで初めて成果に繋がるのではないのだろうか。どんなに優秀な人材でも各個人だけの能力には、しよせん限界がある。皆が協力、協業しあうから偉業が達成でき、また皆で達成できたからこそ、喜びもより大きくなり、次の頑張りに繋がると思うのである。これが出来て初めて、職場に『活力』が生まれ、良い仕事が出来るのではないのだろうか。

確かに、仕事にはある程度の緊張感も、個人の競争力も必要だと思う。しかし、職場内に『コミュニケーション』なしでは、個人の能力・成果だけでしかなく、それ以上のことは生まれてこないと思うのである。「成果主義とコミュニケーション」は、相反するところだと思うが、これが両立できて初めて、会社の発展に繋がるのだと思う。

家庭でのコミュニケーション

続いて、家庭について考えたいと思う。やはり、家庭といえば結婚生活なのだろう。

私は、二十三歳で結婚（早い気もしたが・・）し、今では小五と小二の二女に恵まれて、三人の女性に囲まれ楽しく（肩身が狭いが・・）生活をしている。ここで、あまり人には言っていないが、何故こんなに早く結婚をしたのか告白をしたいと思う。私は、何故か若いお父さんに憧れたのである。そして、子供も女の子で、子供が「娘」と言われる年齢になった時に、街と一緒に歩きたい、娘とデートをしたいと思い続けていたのである。こんな理由で早く結婚してしまったのである。

こんなあほな父親に似付かずに、子供たちは真っ直ぐに成長している（親ばかかな）と思う。あまり家にはいない父親だが、たまに家にいれば、「お父さん、お父さん。」と声を掛けてくれる。「一緒に風呂に入るか。」といえ、未だに小五の娘（胸が膨らみ始めているが）も入ってくれる。嫁さんと口喧嘩をしても、仲裁に入ってくれる。本当に出来の良い子供たち（やはり親ばかだな）だ。

最近世間では、年少者の悪質な犯罪が増えてきている。ワイドショーなんかでは、「切れる子供たち」などという特集も出来たりしている。何故、この様な社会になってしまったのだろうか。私たちの世代という、高度成長期時代に育ってきた。結構、裕福な時代だ。親たちは、朝早くから、夜遅くまで働き続けている。休日も少ない。親子の会話が少ない時代だと思う。日本のどん底を経験している親たちにとって、我子には同じ目に合わせたくないという気持ちが強かったのだろう。私たちの世代は、苦勞知らずの世間知らずだ。こんな苦勞知らずの世間知らずの私たちに育てられている子供た

ちは、もっと苦勞知らずの世間知らずに育ってしまう。悪循環である。この悪循環を私たちで変革しなければならぬと思う。何をやれば良いのか。やはり、親と子の『絆』というパイプをもっと、もっと太く、強固な物にしなければいけないだろう。これには、親と子の会話が必要なのではないのだろうか。目を逸らすことなく会話をすることで、子供たちの不安や不満を取り除くことが必要ではないかと思う。やはり、家庭においても『コミュニケーション』が必要不可欠なのだと思うのである。

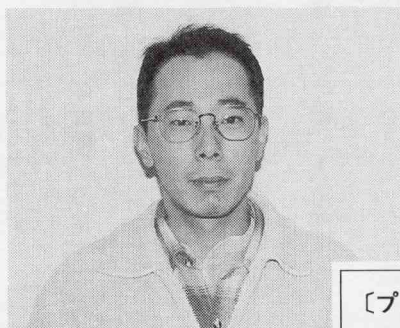
さいごに

「三年B組 金八先生」の第一作目が、私の中三の時に放映されている。私もこの番組を見て感動を共にした一人である。特に心に残っている場面は、金八先生が『人』という文字を生徒に教えていた場面である。『人』という文字は支えあって、やっと『人』になる。こんな意味だと思ったが、やけに感動した。「一人では何もできないんだ。」とこの時に思い知らされた。私は『人』という文字を心に刻み、これからも『コミュニケーション』を大切に生きていきたいと思う。

あとがき

最後となりましたが、いろいろな企画を打ち出し、私たちをまとめていただいた事務局の丹羽さん、また、多種多様な生き方・考え方を私たちにお聞かせいただいた講師の皆さん、そして、一致団結した第十期生のみなさんに感謝を申し上げます、終わりとさせていただきます。

前向きに生きよう



トヨタ車体株式会社 試作部

奥田 竜太郎

〔プロフィール〕

- おくだ りゅうたろう（35歳）
- 1964年 大阪市生まれ
 - 1983年 トヨタ車体㈱入社
- 第2技術部配属（現在、試作部に
名称変更）
現在に至る
- 〈家族〉 独身
- 〈趣味〉 映画鑑賞

〈はじめに〉

思いおこせば、昨年の十二月に「産政塾」の塾生に選ばれ、会合を出席していくうちに、あっという間に終了してしまいとても早く感じられる今日このごろです。

このレポートを書く機会に、産政塾とテーマ「殻の外へ踏み出そう」について振り返ってみよう。

〈きっかけ〉

私が産政塾の塾生になったきっかけは、人事部より、派遣の要請があり人選の結果、私に決定したというものでした。

入社十六年にして、存在すら聞いたことがない産政塾でしたので、決定したからにはやるしかない！という気持ちで参加しました。

〈産政塾へいざ出動〉

第一回目「開塾式」 不安と緊張を胸に出席し、産政塾の紹介・主旨説明と塾生みなさんの自己紹介等……

第二回目「養護施設暁学園 祖父江文宏氏を訪ねて」 子供の虐待死を防ぐとたくさんの子供達といっしょに暮らしていて訴え続けている姿を見させて頂きました。

この時点では、殻を破るというテーマが見えてこなくて、漠然と講義を聞くだけで時間だけが過ぎ

てしまう様な気がしました。

第三回目「フリースタイルスキーヤー角皆優人氏を訪ねて」は欠席させて頂きましたが第四回目以降は、何かをつかみ取って帰ろうと思いましたが、討論後の懇親会でついついいつもの自分に戻ってしまい手ぶらで帰ってしまいがちでした。

〈「殻」って何だろう〉

産政塾へ出席した自分が思っているといけないことかも知れないけど、素朴な疑問として、「殻を破る」ということはどういうことなんだろうと思ってしまう。

自分が小・中学校の頃は担任の教師がよくみんなに「自分の殻に閉じ込まらないで友達を増やそう」と言っていたことを思い出す。

その当時は、そういう話を言われても「どう考えていようと自分の勝手だろ」と思ってしまうが、違った。今になってその言葉を、振り返ってみると、毎日学校へ通って昼の休み時間でも一人でいて、学校が終わると学習塾へ通い、休みの日も家でファミコンなどで、遊び人とのふれ合いがほとんどない人もいた。そうすると自分さえ良ければいいんだという発想になってしまったり、人との接し方がヘタになってしまったり、なおさら人を遠ざけてしまい悪循環になり、一人でいる時間が増えてしまう人がいたことを思い出す。（かくいう自分もそういう傾向が若干あったような気がする。）

人と接するということは、他人の考えていることを理解する上で、一番大切な事で自分にとってもプラスになる事だと信じている。（中にはイヤな人もいますが……。）

少年時代の「殻」とは自分だけの世界を作らずに、いろんな人と接して大きくなろうという事だと思っているが、いざ現在の自分に当てはめようとすると「殻」とは何だろうと首をかしげてしまう。

社会に出てすでに十数年が経つ自分に「殻」を破ろうと言われると何が思いつくのだろう。当然のごとく少年時代の「殻」とは、環境、背景が違っている為、当てはまらないことは事実である。そうすると今の自分の「殻」とは何だろうと思いつくのは

・平和で幸福な家庭

・会社における地位・待遇

・すばらしい友人関係

うーん、どれも当てはまらない気がする。

話は飛んでしまいかもしれないが、自分が生きていく中で、邪魔されたくない物、壊されたくない物、ニガ手な物などがあると思う。たとえば、今はパソコンで情報がいちはやく入手できたり、品物までも入手できたりする時代である。しかし、自分はそういう文明力がニガ手ですぐ人に頼んでしまつて自分で覚えようとしないうところがある。ニガ手意識が先立ってしまい、自分は無理なんだと思ひ込んでしまうことがある。これも「殻」の一種なのだろうか？　だとしたら、自分の「殻」はなんと小さな「殻」なのだろうと恥ずかしくなってしまう。年を取るごとに「殻」は厚くなる一方の様な気がしてしまう。

話は変わるが、日本人は大多数がみんなと同じ行動、考え方を持っていれば安心する民族の様な気がする。（という自分もそのうちの一人？）

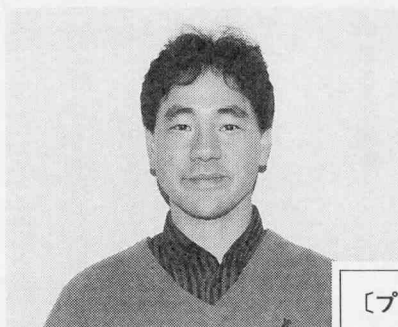
「出る杭は打たれる。」という諺のように、平均点の日本人が出来上がってしまっている様に思えてしまう。(これも一種の「殻」のような気がする。

話が大きくなってしまい、むりやりのになってしまったが、結論としては、入社したての頃の輝き、無鉄砲さ、社会の事を何も知らない第三者として見れる目を失わずに、自分の知らない、見たことのない世界、領域へチャレンジしていきたいと思います。

最後に、産政塾へ参加するチャンスを頂いた会社と、自分の「殻」を考えさせてくれた産政塾に感謝致します。そして、産政塾の塾生の方々にもお世話になりました。今後もし指導お願い致します。

ありがとうございました。

私 と 英 語



株式会社 デンソー工機部

糟 谷 道 広

〔プロフィール〕

- かすや みちひろ (35歳)
- 1964年 愛知県生まれ
 - 1982年 日本電装株式会社入社
日本電装学園で教育
 - 1983年 工機部に配属
現在に至る
- 〈家族〉 妻と娘2人
- 〈趣味〉 ゴルフ

「私は英語が話せない」

私は英語を話せる様になりたいと思ってから十五年以上も経過しているが、未だ英語が話せない。世間にいるバイリンガルの何倍も、私と同じく英語を話したいと思いつつ話せないでいる人々が大勢いるであろう。

私の仕事は製品を作るための設備を作る事である。その設備作りとは、まず自分の所属する工場で設計図を基に各部品を組付け設備を組み立て、それを動かし仕様どうりに製品が出来る様に調整し、その一つ一つの設備をつないで一つのライン（トランスファーライン）を作る。そして、そのラインを各工場に移転し、そこで生産出来る様調整すると言う設備製作を一貫して行う事で、私は入社以来十七年この仕事一筋である。又、各工場へ設備を移転するため出張も多く、遠くは海外まで出張する事がある。

入社当初こんな事を考えた。それは、仕事上では先輩や上司の方が経験も有り物事をよく知っている。当たり前ではあるが、仕事の腕前ではとても叶わない。それでも私が彼らと同じ歳になる頃には彼ら以上に出来る人間になりたいと思っていた。そんな中、自分らしさ、自分は何が出来るかと考えてみた。丁度その頃会社も海外拠点が拡大し、私の職場からも海外出張が多くなり、英語の教育も盛んに行われた時期でもあって、英語なら、あの年老いた彼らよりも優れているだろう。英語が話せたらカッコいい、あいつは凄いななどと、一目おかれる人間に成りたかったのが、英語を話せる様になりたいと思ったきっかけである。

私が一番始めに英語に接したのはたぶん、カタカナを覚えた幼稚園の頃であろう、勿論その時は英語と言う意識はないのであるが、次は小学校高学年でローマ字を習い、中学一年で科目として英語が登場し、ここから英語を本格的に勉強する域にはいり、以後、六年間勉強したつもりではあるが、覚えていたのは中学一、二年までで、それ以降あまり記憶に残っていない。思えば中学一、二年の頃まで、私は英語が得意な科目であったのに、いつの間にか苦手な科目の一つになっていた。入社後はきっかけも有り様々な教育に参加し、二回の海外出張で六カ月もアメリカに滞在した。

冒頭で「私は英語が話せない」と言っているが、六カ月間アメリカで生活しているのであるから、まるで英語が話せない訳ではないが英語のトラブルは数々ある。その出来事をお話しよう。

レストランでの夕食、メニューの中に「ハウスサーロイン」と言うステーキがありそれを注文した時の話であるが、まず注文をした時少しおかしいと思った。それは、肉料理の場合焼き具合等聞ってくるはずなのに何も聞いてこなかったのである。心配は的中した。そこに出てきたのはサラダであった。まだこの時点ではこの後に肉がでてくるのだろうとわずかな期待を持って待っていたが、期待は見事に裏切られ、いっこうに出て来ない。メニューを確認してみると「ハウスサラダ」と言うメニューが有り、これと間違えた様だ。つまり私の「ハウスサーロイン」と言う発音が伝わらなかったのである。それ以来「ハウスサーロイン」は二度と注文していない。このように簡単な英語でも発音の違いで聞き取れなかったり、伝わらなかったりする事は多いにある。

出張中、休みによくゴルフをする機会があった。あえて回数は書かないが何回もと言っておこう。それにアメリカと日本のゴルフ事情のちがひがある。まずプレイ代であるが日本では通常一万〜三万

円位はかかるがアメリカでは安い所だと二十ドル位でプレー出来る。又、ゴルフ場の数では、車で三十分位の所に二、三箇所有り、一時間も走れば七、八箇所有る。日本の様に何カ月も前に予約して、朝五時頃から二時間以上もかけて出掛ける必要はない。そんな事情もあって何回もプレーする事ができゴルフ好きにはたまらない所である。こんな環境のもと子供や女性、老若男女を問わず一人でもゴルフバックを抱えてコースに出てくる。日本のトッププロがアメリカでなかなか活躍出来ない訳は、こんなゴルフ環境にあるのではないかと思つた。

アメリカの地で生活するという事は旅行をするのとは訳が違ふ。特に不思議に感じられるのがお金の事で、初めは十ドルの物を買うのに、一ドル一〇〇円だから一、〇〇〇円かと常に日本円に換算して考えていたが、生活していると十ドルの物は十ドルで日本円に換算しなくなる。英語でも同じ様な事が言える。英語を話そうとする時話そうとする日本語を英語に直して整理して話そうとするが例えば、HOW ARE YOU?と言われFINEと答えるのに、今日は元気だから英語で言うところ……などと考える人は少ないと思う。それは、その程度の英語は十分身に付いているからだろう。とは言ふものの挨拶程度ならこれでよいが、会話となると六カ月もアメリカで生活していてもなかなか話せない。日本語に直さなくても英語がでる様になれば、完全に英語が話せるといえるのかもしれない。

私なりに何故英語が話せないか考えてみた。入社当初は英語に対する熱意もあり、通信教育、社内教育等事有るごとに参加し熱意が冷めぬ様努力してきたつもりではあるが、教育期間中はよく勉強するものの、それ以外の時間になかなか英語に接する事がない。そのうち熱意も冷めはじめ、英語自体が遠のいていった。そこには英語を話せる様になるための計画性がない。やはり英語も仕事と同じで

長期的なビジョンと短期目標を掲げ計画的に努力を継続しなければ、事は成しえないと偉そうな事を考えた。最近、英語教育会社の人の講義を聞く機会がありその中で、講師は学生時代英語が大の苦手でありそれを克服した経験を話してくれた。講師いわく、英語が嫌いになった時点つまり判らなくなる時点まで戻って勉強する必要がある。彼は本屋で十分間ドリルを中学一年から見ていくと二年から判らなくなった事にきずき、ドリルを買い込み二年三年と勉強していったそうです。早速私も本屋で十分間ドリルを確認、中学二年のドリルを買い込みやり始めると、これがなかなか面白い、短時間ででき点数が付けられるので結果がすぐ判る。これは良い物を見つけた。

先日、甥の英語の教科書を見るチャンスにめぐり会えた。教科書は東京書籍の「ニューホライズ」私が二十三年前に習った教科書と同じであるが、内容は全く異なっていた。今でも忘れもしない始まりは、THIS IS JAPAN. からであったがその内容は、HOW ARE YOU? に変わり英語教育の内容も、話す英語に変化している。

世間では変革の時代と言われ、会社でも変革、変革と事ある毎に耳にする。一九九九年私にとって人生のターニングポイントの年である気がする。会社に勤務しはじめ、他会社への出向や組織変更に伴い職場が変わる事はあったが、十七年間設備作り一筋に仕事をしている。年々進歩する技術に呼応するように設備作りのプロとして私自身も最大限の努力を重ね、設備が出来上がる課程での難しい問題を解決してきた。今年役職という今まで以上に責任ある状況に変化し、私自身今までと変えて何か事を起こしたいと考えている最中、産政塾参加の機会が得られた。産政塾のメインテーマである「殻を破り外へ踏み出そう」は、まさに今の私の状況にぴったりであり、渡りに舟であった。

産政塾では私と同じ自動車関係を中心に金融、鉄道、電力、百貨店、公務員と様々な職種の第一線で活躍する同世代の人々が集まり、講師の所へ出向いて講義を聞き、討論し、その現場現実を見たり体験するという、今までの会社教育にはない一面を私に刻みつけた。塾生間では、ここに書けない様な生々しい話もアフター産政塾で聞く事が出来貴重な体験となった。中でも、今回の講師でもあるフリースタイルスキーの角皆氏の行動には驚かされる。現役時代はフリースタイルスキーの第一人者となり、現役引退後全日本のコーチを務め、現在は後輩の指導に携わる彼が、四十を過ぎた今、現役に復帰しオリンピックをめざす事を決意された。この決意の中にはフリースタイルスキーへの熱い想いが彼を駆り立てと思われる。

私もまずは冷めかけた英語への熱意を復活させ、二〇〇五年迄に英語を話せる様にすることを決意し、今世紀中に中学英語をマスターする。そのために、十分間ドリルを完全制覇し、社内の英語認定試験に毎年トライする。二〇〇五年が楽しみだ。

かわっちゃいけないモノは、 かわっちゃいけない!!



松坂屋労働組合

門 孝 裕

〔プロフィール〕

かど たかひろ (37歳)

- 1962年 名古屋市南区生まれ
- 1981年 ㈱松坂屋入社
紳士カジュアル売場配属
- 1986年 ヤングメンズウェア売場へ異動
- 1987年 キャラクターズブティック売場へ異動
- 1991年 外商二部へ異動
- 1993年 ベビー用品売場へ異動
- 1998年 松坂屋労働組合へ異動
現在に至る

〈家族〉 妻、子供3人

〈趣味〉 アウトドア的なこと全般

特に (魚釣り、スクーバダイビング、プレジャーボート、料理等)

月日の経つのは早いもので産政塾が本年一月に開塾し、アッという間に八ヶ月が経ち、全七回の産政塾の活動が終了しました。私の大好きな中日ドラゴンズも十一年ぶりのセ・リーグ優勝を迎えるシーズンとなり、中部圏の小売業者はホッと息をつく機会に恵まれた今日この頃です。

中日ドラゴンズの優勝が百貨店で働く者たちにとって、このご時世では大きな意味を持ちます。なぜなら新聞にも書かれているように東海三県下もたらず中日ドラゴンズ優勝の経済効果なんと一二〇億円、これを逃す手はないからです。仕事に取り組む情熱と同じくらいの意気込みで大好きな中日ドラゴンズを応援し、優勝を勝ち取ることによって優勝セールを開催し、売上も上がるという一石二鳥めざし応援に駆けつけた？ 百貨店マン（ウーマン）もさぞかし多く存在したと思います。

企業業績回復にむけて他力本願ではないかもしれませんが、それほど百貨店業界が冷え込んでいるのは事実です。産政塾メンバーとの雑談の中でも「百貨店には、あまり行かないな。」という声を多く聞きました。なぜ、来て頂けないのか。真剣に考えなければいけない時であり、当社をはじめ業界全体が大転換期であることも産政塾の参加を通じて再認識しました。百貨店業界だけではなく、あらゆる企業が時代の速い流れと来るべき21世紀の大競争時代にむけての対応のため転換・進化を迫られているのは周知の通りであります。今回の産政塾には、当初の目的である仕事を離れた同世代の交流の場で「殻の外に踏み出そう」をテーマに本音の議論を交わし自らを磨くこととは別に、『自己改革・自己確認・自己発見』という結果的かもしれませんが隠れたテーマがあったように思われます。

のべ七回の産政塾の開催にあたり、#1・3・5・6・7の五回（うち二回早退、どうもすいません。）に参加いたしました。#1・7の開・閉塾は別として#3の角皆さん、#5の岡本夫妻、#6の

広瀬さん、いずれの方々も大変個性的であり、自分の生き甲斐・生きる道・スタンス・ポジション、そしてこれからの夢をしっかりと持って日々活躍をされている方々という印象を受ける講師陣でした。

企業が時代に対する対応・改革だけではなく、アメリカのケネディ大統領が、はじめての大統領就任時の演説で時代の変化と個人の役割について「国が国民に対して何をするのではなく、国民が国に対して何ができるのか考えなければならない時だ」と表現し、国民一人ひとりに自己改革を求めたわけですが、今まさに私たちを取り巻く環境は同様であり、情報化社会の発展をはじめ様々な社会ルールの変更に伴い自己のポジションや役割を来るべく新しい時代にあわせ変化を迫られています。しかしながら、今回の産政塾を通じて一番自己改革が遅れていたのは当の本人だったかもしれないとも感じました。

一方、現代社会において自己改革は当たり前のように言われ続けられている今日ですが、産政塾の講師方々の生き方をみれば、頑固なまでに自分の意志を貫き通す角皆さん、子供の頃の夢を今も持ち続けて生きている事のすばらしさには大変感動しました。また、昔ながらの家業の鍛冶屋を引き継ぐ広瀬さん、その心のこもったモノづくりは今も変わっていません。時代の流れとともに街並みは変わり新たな発見を教えてくれた岡本夫妻、時代の変化とともに変わりゆくモノは数々あるが、「かわちやいけないモノは、かわちやいけない!!」ということも大切であり、意義があることだと教えてくれました。

自己を見つめ直す機会という点においては、産政塾は大変良い機会でありました。現代の社会生活において家庭を離れ会社を離れこのような機会を設定することは、普通の人ではできないからであり

ます。もし、ある日突然自分を見つめ直すため家族に旅にでるとか、会社を休むと言ったならばどんなことになりましたか？　きっと頭がおかしくなったと言われるのが関の山であります。また、色々な人生観・価値観を持った塾生との出会いは、何にも増して大きなプラスポイントでありました。第十回以前の塾生のメンバーリングがどんな仕組みとなっていたかは解りませんが、一つ言えることは年齢にある程度の幅があったことは、私にとってプラスでありました。自分を見直すにあたり過去のことはある程度自分が良い面・悪い面含めて経験してきたことでありますが、今後の未来のことを考える場面では、諸先輩方の話は大変役に立ち、ましてや自分と違った産業に実際に携わっている人たちであれば尚更でありました。また、人間関係の永遠の課題であるコミュニケーションについても少し話題は飛んでしまうかもしれませんが、世間でよく話題となっている社会的問題の年金制度をはじめ介護・健康保険制度の見直しなどもジェネレーションギャップ（世代間格差）を埋めなければ決して解決なされるモノではないような気がしますし、そういった意味で今回の産政塾のメンバーには大変恵まれました。

さらにコミュニケーションについて言えば、塾生諸先輩たちは実に家族を大切にし、子供たちと一緒に遊んでいるなど感じました。その中でポイントやはり親子共通の趣味を持つということでしょうか。私自身の趣味は色々ありますが、今は海へ出かけ誰もいない浜辺へ船で渡り魚釣りやダイビング、そしてアウトドアアクッキングをすることにはまっています。この夏も釣った魚（キス）を天ぷらにしてそうめんとともに食べ、最高に楽しい時を過ごしました。船をマリーナから出すことから始まり、魚が釣れない時はその分のランチのおかずがなくなるという緊張感のもとでの魚釣り、そし

てみんなで手分けして作る料理。一日の一連の作業が本当に楽しく有意義に感じるひとときです。是非、子供たちにも体験させてやりたいと思いますが、まだ幼い子供たちを連れ出すには海での危険は多すぎるのもう少し成長したら連れて行ってやろうと思います。親の押しつけではなく、本人たちが本当に好きな一緒にできる何かを見つけていきたいとも考えます。まずは家族と一緒に過ごす時間を多く持つことを心がけ、また、忘れていけない奥さんへも日頃の感謝を含めコミュニケーションを図っていききたいと考えております。

また、塾生と話をすればするほど、私との違いとして、仕事をはじめ家庭・人生において現時点の自分の居場所や役割が明確になっていることに気づきました。自覚が足りないと言えばそれだけのことでありますが、たとえば野球を想定すると守備でショートであれば、ある場面でバッターがライト方向へ球を打ったら2塁ベースのカバーに入って球が来たらすぐにホームに投げるといった一連の動作があるように、そのポジションにあった役割（行動・作業）をしっかり理解していないということ。また、役割をしっかりと理解する前段での役割に応じた能力不足があげられます。たとえば海へ潜るスクーバダイビングの基本的技術として「中性浮力」という技術がありますが、これは肺の中やBC（救命胴衣）に空気を出入れできるベストの空気を調節して水中で体は無重力状態に保つ技術のことで水の中では非常に体力を消耗することから必ず身につけないといけない技術であります。このようにやるべきことが明確であってもそれに見合う能力・技術が必要であるように、その能力・技術が私には足りないように思われるので、まずは基本的能力・技術を習得するようがんばっていききたいと考えます。

新しい年度の二〇〇〇年を迎えるにあたり、タイミングよく産政塾に参加できたことは、誠に不透明な時代環境の中で「だから私はこうありたい。」と本年三十七歳の人生の折り返し地点で自身のセカンドライフを考える機会を設けていただいたことは、関係者のみなさまには大変感謝しております。

また、産政塾の今後のあり方について要望がひとつあります。中部圏を代表する重鎮たる企業の塾生選出である産政塾であれば、もう少し地元地域に密接したテーマに乗っ取り論議および活動されてもいいのではないかと考えております。ここからの中部圏では瀬戸市で開催される万博博覧会、中部国際空港の建設など大きなイベントが21世紀をむかえ続きます。我々の企業そして我々個人も地元地域で果たすべき役割は、それなりに大きなモノと考えるからです。また、これから地元地域で何が行われようとしているか知る権利もあると思うからであります。色々政治的背景はあるにせよ「現実はどうなんだ」「現場はどうなっているんだ」ということを踏まえ論議すれば、チェック機能というレベルまでとは言いませんがきつと意義のある活動ができるように思いますので今後の産政塾に期待しております。

最後に、短い時間でありましたが本当に楽しく活動（酒を飲みながら好き勝手を言える？）できたことに對し、塾生メンバーならびに事務局の丹羽さん・岡田さんありがとうございます。また、いつかどこかお会いできることと早期に＃8の開塾（飲み会）の連絡がくることを楽しみに待っております。

き っ か け



中部電力株式会社

川 上 茂 浩

〔プロフィール〕

かわかみ しげひろ (32歳)

- 1967年 鹿児島県生まれ
- 1986年 中部電力入社
知多火力発電所 発電課配属
- 1997年 新名古屋火力発電所 発電課へ
転属 現在に至る

〈家族〉 妻、犬一匹、猫二匹

〈趣味〉 スポーツ全般 (特に野球)

《はじめに》

今年で社会人（サラリーマン）になってから、十四年目になる。九州の高校を卒業してからの話であるため、いままでの人生の半分近くは、この（愛知県）地で生活していることになる。

九州に住んでいた頃は、実家が農家であったため、家の手伝いと部活（野球）に明け暮れる毎日、自分の時間は、ほとんどない状態であったため、農家に比べるとサラリーマンの家庭は「いいな」と憧れていた。

なぜ、「いいな」と思ったかというところ、サラリーマンは決まった休みがあり、収入も安定している。それに比べ農家は、年中無休で一生懸命、汗と土にまみれて働いているのに、収入も不安定で苦労が報われていないという思いが強かったからである。

しかし、そんな私も会社生活十四年目を迎えると、それなりに仕事も忙しくなり、サラリーマンの辛さ、苦勞も分かり、いろんな柵も増えてきているせいか、単に「サラリーマンはいいな」と言う気持ちには、薄れてきている。

そんな気持ちを持った三十二歳のサラリーマンが、産政塾に参加したことを「きっかけ」に産政塾誌という紙面を借りて「きっかけ」という題材で話をさせていただくことにする。

《野球をはじめたきっかけ》

私が初めて本格的にスポーツをはじめた種目は、最初から野球でなかった。

さて、どのスポーツが最初だったかとういと、今、オリンピック予選等で盛り上がっているサッカーだった。親の許しが得られなかったため、小学校四年からはじめたのだが、それまでは、ただの体育の授業が一番楽しみな小学生だった。

そのサッカーチームは決して強いチームではなかったが、放課後毎日ボールを追いかけて、小学校六年の時には、フォワードでゴールを狙う少年になっていた。

普通であれば、中学校に入ってからサッカーを続けることになるが、私の入った中学校には、サッカー部が存在せず、ボール系統を扱う男子の部活は、卓球と野球しかなかった。それは、全校生徒が二百名程度しかない小さな中学校だったため、しょうがないかもしれない。

もともと、「巨人の星」の再放送をみて、嫌がる兄貴を連れだしては、ピッチャーの練習をし、プロ野球の選手になる夢をもっていた少年だったため、野球をはじめるときは何でもよかった。

ちなみに、中学校での野球の成績はというと、指導者とメンバーにも恵まれたおかげで、楽しく野球をすることができた。そして県大会では二度、三位になり、甲子園に出場するような高校から声をかけられる、今までの野球人生の中でも一番輝いていた時期だったのではないだろうか。

高校時代（硬式）も会社（軟式）に入ってから野球をやっている「きっかけ」になったのは、中学時代の野球がベースになっていることは間違いない。

そして、三十二歳になった今でも、週末のほとんどは野球三昧で、野球がない日は、やることがあっても、暇にさえ感じるような「野球バカ」に近づいてきている今日この頃である。

《棚からぼた餅のきっかけ》

高校三年の夏までは、限りなく可能性の少ない甲子園出場の夢を追いかけ、部活（野球）ばかりやっていたため、成績が良いわけもなく、クラス（四十人）の真ん中がいいところで、文武両道なんというかわつこいい言葉は、私にはあてはまらなかった。部活で遅くなるときは、夜十時を過ぎるため飯を食い、風呂に入って寝るだけの生活の繰り返し。まっ、部活を一生懸命やっている高校生にはめずらしくない話ではあるが・・・

案の定、甲子園出場の夢も絶たれ、さて、この後どうしようと考えたと、進学する学力もなかったため、就職を考えるしかなかった。

前述に述べたとおり、実家の農家を継ぐよりもサラリーマンがいいと思っていたし、幸いバブルがはじける前で景気もよく、工業系の機械課だったため、求人結構ある頃で、選り好みしなければ就職先はあった。

さて、本題の「棚からぼた餅のきっかけ」であるが、それまで部活にかまけて勉強などしなかった私が、部活が終わって暇もできて、ちょっと勉強する気になった。

その結果、クラスの真ん中程度だった成績が、秋以降十番以内に定着した。親もやればできるのだから、早くからやれば良いのと言われたことをよく覚えていてる。

そんな中、就職先を何処の会社にするか選ぶ段階に入り、今働いている会社には、私より成績の良い（クラスで二番）中学校からの友達が名乗りを上げていた。

ところが、その友達は色盲の気があったため、電力会社には不向きということになり、私にチャンスが巡ってきた訳である。入社試験に受かった時は、その友達に足を向けて寝られないと思った。これで、「棚からぼた餅」の訳が理解していただけると思う。

《産政塾に参加したきっかけ》

もともと、私は産政塾というものが存在すること事態を知らなかった。そんな平成十年十二月のある日、上長からこういうものが開催されるが、「君どうだ」と話があった。当然、「産政塾ってなんですか？」というのが本音であったが、資料を見てみると現業系部門および各企業（百貨店・鉄道・銀行・電力他）の若手異業種人材交流の場であることが分かったため、これはチャンスだと思った。

なぜ、チャンスと思ったかとういと、私のように発電所勤務者の人間関係は、仕事の付き合いの人間関係が大半であり、非常に狭い人間関係だと感じていたからである。

それに私は、地元出身の人間に比べ、九州から出てきていることもあり、近隣に友達が居るわけでもなく、人間関係を広げる絶好の機会ができたと思った。

《殻の外へ踏み出すきっかけ》

「殻の外へ踏み出そう」というテーマで七回にわたり産政塾の会合が開かれた。

よく、「殻に閉じこもっているのはだめだ」というような言葉を聞く、簡単な言えば「世間知らず」はダメだということかと、自分なりに理解したが、具体的に「殻」って何なのかということは、はっき

り分かっていない。

産政塾では、毎回、我々、サラリーマンとは違った価値観を持つ「擁護施設の園長、祖父江さん」・「フリースタイルスキーヤーの角皆さん」・「中国からの留学生、常さん」・「野外活動研究会、岡本信也さん」・「ライブカフェ足助のかじやさん、広瀬明史さん」方を講師に迎え、いろいろな話を伺ったが、本当にいろいろな人生があるのだなと感心した。

サラリーマンというある程度、計算できる環境の中で生活している私には、とても講師の方々の生き方は真似ができないし、皆さんの考え方が全て正しいと思っていた訳ではないため、産政塾に参加した当所から、それぞれの講師の良い所、自分に足りないと思う所だけを吸収しようと考えていた。

自分なりに今まで前向き生きてきたつもりでいるため、今までの自分の人生を否定する気もないし、常に向上したいという気持ちは持ってきたと思っている。

その向上心を今まで以上に強くする「きっかけ」にできたのが、今回の産政塾だった。きっとこれからの人生に役立つ貴重な経験になったと思う。

《まとめ》

今回、題材として、「きっかけ」という言葉を使わせていただいた理由として、世の中の誰にでも人生の節目となる「きっかけ」があり、良くも、悪くもその人の人生を左右すると、常日頃から感じていたからである。私の場合の「きっかけ」を幾つか紹介したが、「きっかけ」というものは、物事が起こった後に気付くものであり、成功した場合、失敗した場合でも、その「きっかけ」を後で考えられ

る余裕があれば、失敗を繰り返すことも少なく、成功に関してはその確立が高くなると思う。私は今後も、「きっかけ」を意識して、前向きに人生を過ごすようにしたいと思っている。

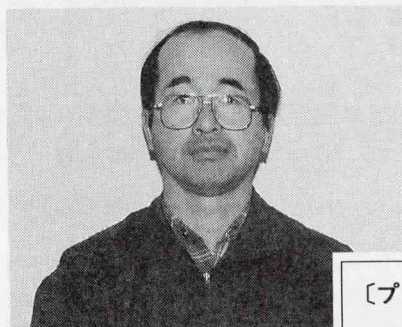
《最後》

産政塾に参加して、いろいろな業種のいろいろな人と会話をし、話を聞くことができた。今後こんな機会は、めったにないだろう。

産政塾に参加した塾生の方々とも、この場限りのお付き合いになると寂しい思っていたが、閉塾式の際、番外編の幹事も決ったため、逢える日を楽しみしていると共に、この関係が継続していけたらなと思っている。

最後に、お世話になった事務局の丹羽さん、第十期塾生のみなさん、講師のみなさん、本当に貴重な体験をありがとうございました。この経験を実り多きものにできるように今後、精進していきます。

「もう少しゆっくり」がいい



アイシン精機㈱ 半田電子工場

小坂 好伸

〔プロフィール〕

こさか よしのぶ（45歳）

- 1954年4月 三重県生まれ
- 1973年4月 アイシン精機㈱ 入社
教育訓練推進部（現学園生）
- 1974年3月 工機工場金型課に配属
- 1990年3月 アイシン高等学園に異動
- 1999年3月 半田電子工場センサ課に異動
現在に至る

〈家族〉 妻、長男（11歳）・長女（9歳）
二女（8歳）

〈趣味〉 ドライブ、釣り、家庭菜園

プロローグ

ここ数年間、「これからどう生きるか」（ちょっと大袈裟か？）なんてことについて、いろいろ考えたりしたのですが、当然「結論」なんてものはなかなか出てくるような題材ではないし、死ぬ間際に「馬鹿なこと考えとったなあ」と思うのが関の山なんでしょうが、この「産政塾」と、今年の目標の一つだった「東紀州の熊野古道全踏破」を終えて、気付いたことを書いてみようと思う。

1 気付いたこと

その1、人間は心・「技」・体

その2、人間は「金抜きが素敵」

その3、人間は「ゆっくり」がいい

今の職場に異動してからまだ半年余りですが、物を生産する工場ですから短い時間で良い物を沢山作ればいいわけです。ところが、前にあげた1、2、3には全て当てはまらないことに最近気付いてちょっとショックです。

その1「技」

ここで言う「技」とは、「技術」ではなく、「技能」です。

技能というのは私が解釈するには「判断の基準が自分にあること」でして、いまの物づくりは、人が作った物でも装置で「評価」しないと「不良」が流れてしまいます。

当たり前の事かもしれませんが、誰がやっても同じ物を短時間で大量に作ることが評価されるわけですから、「基準」は不変でないと困る。だから第三者（装置も含めて）が評価しないと「安くていいもの」はできません。だから「技能者」なんてものは殆ど育っていないんじゃないんでしょうか。

その2「金抜きが素敵」

これは言うまでもなく「生産」ですから金抜きには考えられない。全ての職場がこの通りだとは言いませんが。わが社は自動車部品メーカーですから「安く作って高く売る」ことで給料やボーナスがいただける訳ですからね。

その3「ゆっくり」

生産職場は「1秒でも速く作る」ことが大切なのです。20秒かかる仕事を19秒でできたら一日当たり（8時間で）72個生産が上がります。これは大変良いことです。

しかし、作るのが人間ですから限界があります。しかも人によってその限界が違うので、できる人とできない人との関係がぎくしゃくしてくることも稀ではありません。

職場が楽しければ仕事も面白いのです。何方か片方がおかしくなると、もう片方も嫌になってしまいます。もっと厄介なのは「人間は手抜きをする動物」であるということ、作業の中には「付加価値を付ける作業」と「出来ばえを評価する作業」がありますが、前者は一目瞭然、やったかやらなかったかは品物を見れば分かる。ところが後者はやらなくても製品の形が変わるわけはありません。品質管理が行き届いている今日では不良が少ないのも事実ですがゼロではなく、従って時には大きな品質問題になることがあります。

(不良品の選別で二カ月の間に二回も大阪に出張し、帰ったら日付が変わっていました)

2 産 政 塾

いろんな人を訪ねて、見たり聞いたり或いは実践したりしました。全てが初めて体験することばかりでしたが「共通点も多い」ことに気付かされたというのが一番の収穫でした。

まずは、「自分のやったことは自分で評価している点」です。角皆氏や広瀬氏は、相手があるというか「出来ばえを評価するのは他人」の部分も多いのでしょうか、自分のレベルを把握できているからオリンピックを目指す決意をされたのだと思うし、店に刃物を並べ、シンガーソングライターとして活動されているわけです。

もうひとつは「強い思い」をもって活動されているということ。先に述べた「金抜き」であればあるほど、素晴らしい結果が得られるように思うし、人々を感動させる「作品」に仕上がるのではと感じました。

3 東紀州の熊野古道全踏破

「熊野古道」とは熊野三山へ詣でる道で和歌山ルート、奈良ルート、そして今回私が挑戦した三重ルートの3つが代表的です。平安時代から有り、特に江戸時代に伊勢参りが盛んになると「伊勢へ七度、熊野へ三度」や「蟻の熊野詣で」等といわれ、伊勢と熊野は「セット旅行」の様なものだったみたいです。紀州徳川家の領地だったこともあり、当主の領地巡見のために整備されたそうで、五代当主で後の八代將軍吉宗公(暴れん坊將軍)の頃に完成させたもののうち、一部が現存しているので

す。

とはいえ、きれいにつながって残っているわけではないので、幾度かに分けてチャレンジしました。歩いてみて強く感じたのは、工事をされた方々の「道への思い」であり、旅人への「思いやり」でした。

伊勢く熊野ルートで最大の難敵はやはり「豪雨」でしょう。そのため、全区間の8割以上が「石畳」なのですが、ここのは、東海道の「箱根」や中仙道の「馬籠・妻籠」等よりも、「道づくりの考え方」が明確に見える。一番感じるのは「疲れない」ということです。

私は五回に分けて挑戦したのですが、二回目迄はただ漠然とそう感じたというレベルでした。ところが3回目のとき、石に腰掛けて休みながら、とんでもないことに気付いたのです。それは石が全て水平に敷かれているということでした。石の大きさに合わせて勾配が上がったり下がったりした分だけ段が付いてある。つまり階段状になっていたのです。

ですから足が常に水平を保て、疲れないのです。四〇〇年経て、そのことを私に気付かせてくれたこの道がとっても好きになりました。と同時に仕事に対する「思い入れ」の大切さ、必要性、責任感も強く感じました。そして、「技・金抜き・ゆっくり」じゃなければできないことにも気付いたのです。

4 ドライブ（クイズラリー）

昔はこれでもラリーリストでした。ある時の練習走行で、コントロールを失った私の車は、右にスラ

イドしながら縁石に右リヤを引っ掛け、反動で横転して屋根を下にしたままで七〇m滑り、止まりました。車は当然のごとく「廃車」、ドライバーは1ヵ月の入院を余儀無くされたのです。今でも残る右腕の傷は、それを見るたびにあの出来事が鮮明に蘇ります。ラリーストの宿命とでも言うのでしょうか、事の始終を目を瞑ることなく脳裏に焼き付けてしまったようです。この入院生活で「もう止めよう」と決心しました。

しかし、あの「コマ地図」を見ながらコースを辿るゲームは、一度やったら止められないのか、しばらく経って「クイズラリー」なるものにエントリするようになり、今日まで続いています。競技ラリーと違って、スピードは必要ないので、家族そろって出かけるのですが、これも始めてもう十五年以上になります。

長くやっている、道とそこで暮らしている人々との関係が見えるようになりました。これも競技ラリーのように「スピード」が早いと気付かない事なのです。

道には顔があります。「風格」というか「落ち着き」と表現するのがよいのか、良い言葉が見つけれませんがそれが「道幅」や「通行量」ではありません。

クイズラリーとはいえ、公道を使いますのでいろんな道に出くわします。真っ直ぐに2km続く道や、コーナーの度に「切り返し」が必要なもの、極めつけは「スイッチバック」なんてのもある。当然、ナビゲーションシステム（私の好みじゃない）には出てこないような道ばかりです。

ラリー形式ですから当然「ミスコース」もある。ONコースするためのルートや、競技終了後の「帰路」は、自分で判断して決めるのですが、その時一番困るのは、選んだルートが「行き止まり」

になることです。その時の決め手になるのが「風格」なのです。

地域の人々が、車のなかった時代から、その道をどれだけ「頼り」にし、「大切」にしてきたのか。その度合いが高いほど、行き止まりではなく、どこかに通り抜けるのです。それが、「石垣の古さ」や「路肩の広さ」や「石柱」や「灯籠」などなど、道が「こっちだよ」と言っているようです。これは使えますよ。遠くへ出かけて渋滞したときなど、方向感覚さえ間違わなければ、この方法は大変有効です。まあ、失敗しても「すべての道はつながっている」訳ですから「やり直し」ができるし、思わぬ発見もあって楽しいですけどね。

5 これから

21世紀は、職場も含めて生活がどんどんスピードアップされていくのですが、人間の感覚がそれについていけないのかどうかというと、難しいのかもしれないね。

人間は、「余裕」がなくなると「ミス」をする動物だと言われています。私は、小さい頃から（今も変わらないけど）忘れものが多い子でした。そのことについては他人に言われなくても気になっていて、登校前や授業前に「チェック」の時間を自分なりに作り、防止してきました。ところが、チェック忘れをした日にかぎって、「忘れもの」をしていたり、別のことで忙しかったりの後で、「チェック」忘れた日に限って……と悔しく思ったものです。最近、職場でちょっと大きな不良が出て、色々と要因を考えたときに、この子供の頃のことを思い出しました。

「チェック忘れ」をするときというのは「余裕」のないときで、何かが原因でその「余裕」がなく

なったわけです。例えば、朝寝坊して時間が詰まってしまったとか、急に宿題を思い出して慌ててやったりとか、それは「チェック忘れ」というミスを犯しているし、慌てて「準備物」も忘れているので、結果として「忘れもの」になる。仕事に置き換えると、「余裕」のないときに「標準作業」が守られずに不良が作られる。その後のチェックで、本来なら見つかるその不良が、チェック自体も「余裕」がなくなることにより、手抜きされ、不良は未発見のまま後工程に流れてしまうということになるのです。

仕事の中で「付加価値を付ける作業」は、人間の慣れとやる気でどんどんスピードアップされ、それに作業改善が加わることにより、短い期間である程度の工数低減が成される。

これは、物を作るときには「素人は頭で作り、玄人は体で作る」と言われるように、簡単な作業なら、短い時間で「素人」から「玄人」に変身し、立派に仕事ができるのです。

それに比べ、「出来ばえを評価する作業」は、慣れると緊張感が薄れ、「観る」が「見る」になってしまふ。その結果「作業」だけが単調に行われ「評価」が疎かになるのです。

仕事に限らず、例えば「車の運転」なども同じことが言えるのではないのでしょうか。

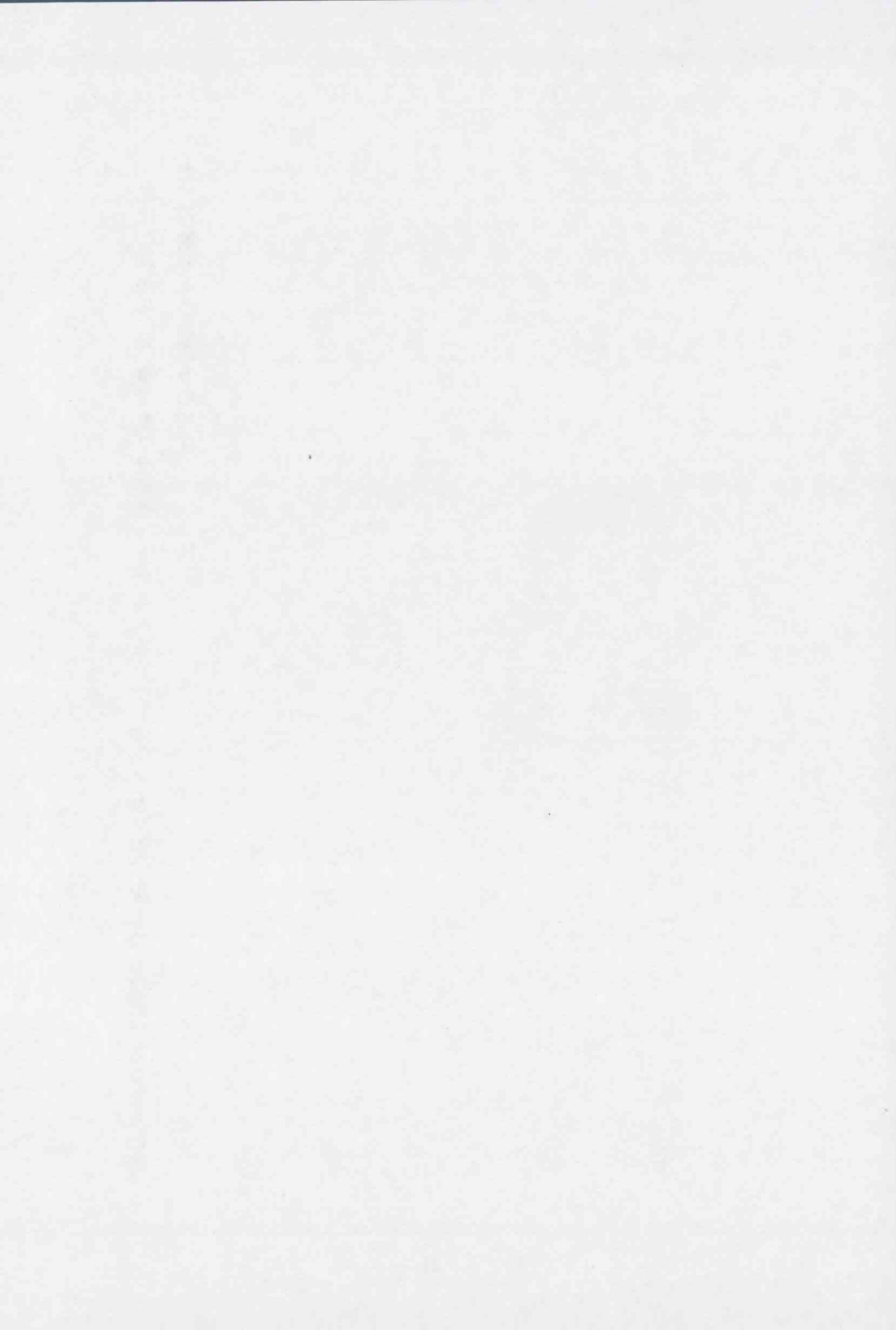
「運転の未熟さ」が事故の要因なら、18・19才の人の事故が多いはずですが、そうではなく、21才の人の事故が多いのです。また、「スピード」が要因なら、交差点内の事故は少ないはずですが、

「安全」は、仕事で言えば「確認する作業」ですから、「慣れ」は禁物なのです。

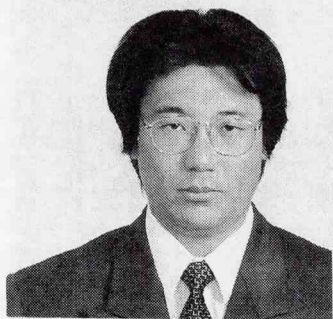
だとすれば、確認したり、評価したりする作業は、ある程度の余裕と時間が必要なのであり、これからの生産現場ではもう少し「人間工学」としての「時間」の設定が必要になってくるのだと考えま

す。

私はこれから、仕事でもプライベートでも「もう少しゆっくり」を、少しでも実践できるように考え、行動しようと思うのです。



最近思うことと今後の目標



豊田市役所 環境部廃棄物対策課

近 藤 理 史

〔プロフィール〕

こんどう よしふみ (32歳)

- 1967年 愛知県生まれ (三好町)
 - 1990年 トヨタ市役所入庁
市民部公害課 公害水質センター
に配属
 - 1998年 環境部廃棄物対策課 現在に至る
- 〈家族〉 妻、長女 (5 歳)・次女 (0 歳)
(その他同居家族) 祖父、祖母、父、母
- 〈趣味〉 テニス、スキー、釣り、音楽

時が経つのも早いもので市役所に入ってもう十年目を迎えてしまった。

入庁して最初に公害水質センター（現在の環境水質センター）に配属され、そこで八年間すごした。そこでは、専門分野である水質などの分析業務を行っており、半分趣味が仕事のように過ごしていた。また、センターでは十何年振りの新採用者であったため、職場の上司にはよくしてもらえた。

分析業務の他にも、小中学校で行っている水生生物調査や酸性雨調査など初めて行う調査の担当もさせてもらい大変有意義であった。

しかし、昨年からは、突然、新しくできた廃棄物対策課に配属され、右も左も分からない状態で現在に至っている。

さて、産政塾の最終回の前後、国立公衆衛生院に五週間の研修があり、その残務整理に追われる中、別居の祖母の訃報や妻が早産で入院、次女の誕生などが次々と起こり産政塾のレポートを書かなくてはと思いつつ大幅に期限を過ぎてしまい、大変申し訳なく思いながらこの原稿を書いている。

今回、産政塾の卒業にあたり、私生活や国立公衆衛生医院の研修や仕事の中で感じたことを書かせて頂こうと思う。

仕事の中で最近思うこと

今の仕事というのは、廃棄物対策課という課名にあるように、廃棄物についての仕事である。廃棄物についても産業廃棄物処理業者への許可、監視及び指導といったことや企業などから出る産業廃棄物についての処理が適正にされているかを監視・指導する部局である。

こういった仕事をする上で、最近思うことは、次のことである。

入庁したころの社会構造は、製品を使うユーザー一人ひとりが、便利さや高品質、軽量化などの付加価値を追求したことから、大量生産、大量廃棄といった社会構造となっていた。このことに加えて、見た目や加工のしやすさなどから特殊金属及び複合材料等、多種多様な新素材が使われるようになった。

ひと昔前は、廃棄となった製品から、金属などの有価物を分別することが容易で、再利用する社会が普通であり、廃棄物としてすぐ捨てることがなかった。ところが、大量生産、大量廃棄時代に生産されたものを見ると、安く生産できる代わりに、再利用するには複雑な素材が多い。再利用するためにはコストがかかり過ぎ、海外の安い労働力により生産された新品の製品には太刀打ちできないため、結局そのまま処分されているのが現状である。

このような社会構造が最近見直され、現在では、再利用することを目的とした製品開発などがなされ、企業によっては、排出される産業廃棄物をゼロにする企業も現れてくるなど次世代に向けた循環型社会構造が徐々に形成されてきている。

しかし、自分を含めた一般の人をみるとさほど変わっていないような気がする。

自分の家庭を例にとると、買い物に行く場合、買い物袋を持参するように妻に頼んでも忘れることも多々ある。また、食品以外の買い物に行ってレジ袋が要らない時は断っているが、通常はレジ袋等に入れてもらっている。そうしたことから包装紙、箱や袋など意外と家にはゴミがたまっている。そして家では、自分の生活する場所にゴミがなければよいと思ってしまいうため、行政の回収に任せて

しまう。

このことは、小さな企業でも同じだと思う。ゴミ回収は業者が処分しているため詳しいことは知らなかったり、安く処分できればよいと考えている企業も少なくないと感じる。

こういった、誰かが片付けてくれるから別にいいという考え方をしているのは、ゴミを減らすことはできない。また、会社の方針だけに従っているのは、意味がわからないままことが済んでしまう場合もある。

このように、我々一人ひとりがゴミの減量化や処理について無関心では、なかなか循環型社会に進まないし、廃棄物の不法投棄など不適正処理になってしまう場合もある。

従って、我々一人ひとりが企業や家庭生活の中で極力再利用、再資源化する意識を持つて行動しなければ、社会が循環型社会に向けて動こうとしてもなかなか進まないと思う今日この頃である。

今後の目標

産政塾のテーマを確認すると、「殻の外へ踏み出そう」となっていた。では、殻とは何のことだろうかと自分なりに考えてみた。

殻とは、自分の「世界の限界」のことなのかなと思う。よって、「殻の外へ踏み出そう」とは、「自分の限界を作らず、常に新たなことにチャレンジすること。」とかつてに解釈してみた。

「殻の外へ踏み出す」ために、来年（二千年）を迎えるにあたり目標を掲げたいと思う。

(1) スキーについて

今回の産政塾でスキースクールに初めて入り教えてもらい、やっぱり、基本が十分でなければ上達しないのだなぁと実感したため、来年には、自分からスキースクールに参加してみたいと考えている。

スクールの内容にもいろいろあるが、いきなり今回の角皆さんのモーグルスクールではなく、先ず、基礎スキーである程度どこでも滑れるようにになりたい。

また、機会があったら、現在もっとも嫌いなコブにもチャレンジしてもいいかなと思うことがある。

(2) 音楽について

実は、中学校から十年間、吹奏楽団でホルンを吹いていた。大学時代には、大編成やアンサンブル（金管5重奏）で東海大会に出場するなど輝かしい成績？ と楽しい日々を送っていた。その後、ほとんど楽器を触っていない状況だった。

しかし、産政塾の原稿最終締切日の前に久しぶりにアンサンブルのコンサートに出かけ、そこで聴いた音楽は、久しぶりに心を熱くさせるものがあった。

そこで、来年の目標として、倉庫の奥に眠っている楽器を出してきて、メンテナンスをすることと、楽器に息を入れてやることを目標とした。

また、先日のコンサートで恩師に市の吹奏楽でホルンが足りないから入ったらと誘われたため、大学時代のように吹けるようになったら、団体に入って演奏したいと考えている。

(3) 前向きに考える

実は、産政塾が終わり本来の原稿の提出期日の直後、十一月四日に次女が誕生した。予定日より2週間強早く生まれたため、ギリギリ保育器に入らなくてよいくらいの大きさであった。その後の成長をみると早産気味だったためか、なかなかミルクも飲まず体重が増えなかった。

当初、この体重が増えないことを妻は悩んでいたが、現状を悩むより、今後どのようにしたら良いかを考えようと現在にいたっている。

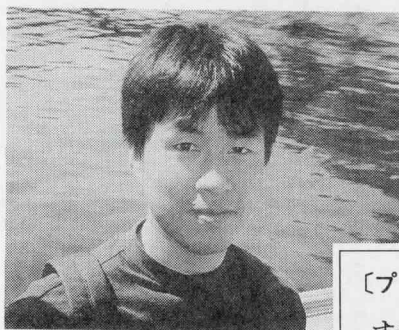
このことは、仕事でもいえることで、前向きに物事を考えることができれば、仕事が楽しくなるだろうし、楽しく仕事ができるように努力したい。

最後に今回の産政塾で、普段接することのない多くの方々とお話することができ、本当に貴重な経験をさせてもらいました。ここでの付き合いを少しでも長く続けたいと思います。

追伸

最後に、第十期の産政塾の皆さん、そして中部産政研の丹羽さん一年間ありがとうございました。

まだ見ぬ我が子供と共に



日本特殊陶業株式会社 工務部

杉 本 道 男

〔プロフィール〕

すぎもと みちお (29歳)

- 1970年 愛知県名古屋市出身
- 1993年 日本特殊陶業株式会社 入社
生産技術部 配属
- 1997年 工務部整備課 配属 現在に至る
- 〈家族〉 妻
- 〈趣味〉 ラジコン、パチンコ、釣り、
日曜大工

早いもので産政塾最終回から二カ月以上が経過した。当然・・・状を頂く事が出来る重腰人の一人となつてしまった。(本当に一人だけかもしれない)一カ月後に待望の最初の子が生まれることに気が廻り過ぎていたわけではなく、父親としての自覚と共に自分に心配な今日このごろである。

今、産政塾での体験を振り返ってみると、一番心に焼き付いているのは講師の方々が皆輝いて見えそれでいて親しみを感じた事だろう。何か子供の頃に感じた様な、懐かしさと温かみのある人達だった。多分、それは自分の純粋な心を大切にして生きている姿に子供の頃に描いた夢を思い出し、又、何度もの挫折を経験しそれを乗り越えてきた姿に人としての憧れを感じたのだろう。そして彼らを今日まで導いてきたものは夢に賭ける熱い情熱であろう。

サラリーマンとして働く人々の中には現実の生活との葛藤の末、夢は夢であり続けるべきだと妥協を選ぶ人もいます。しかし自分の場合は少し違っていた。親もサラリーマンであつたせい、最初から夢と現実とは別ものと考えていた。それは恐らく自分一人ではないはずだ。中学を卒業後当たり前の様に普通科高校に入り、連夜徹夜で大学受験勉強に励み大学ではただ単位を取るだけの勉強に終わり、教授が紹介してくれた企業の就職試験を受けて現在の職に就いたのである。

今まで自分の人生を振り返つてみた事が無い訳ではないが、自分の辺りも同じ様な人ばかりであつたせい、今回産政塾の講師の人と出会い初めて自分の人生を評価してみた様な気がする。子供の頃の夢が小っぽくであり、大人になってお金を稼ぐ手段はサラリーマンになり給料を貰う以外には無いと思つていたのか、要するに幼いころから世の中を観る視野が狭すぎたせいであろう。

僕は朝五時に起き、朝食と支度を済ませて五時四十分には家を出て、最寄りの駅から電車を三本乗り

換えて、次にバスに乗って会社に到着する。所要時間は一時間三十分。長旅の疲労を出さない為に座れる時間を選択しての早朝出勤だが、それでも駅のホームに並んで席を確保しなければならぬくらいだ。しかも帰宅時では一時間に四本の電車を一本見送ることもしばしば。

そんな繰り返しの毎日に耐え忍ぶ一人のサラリーマンを幸せの天使が救ってくれました。冒頭にもありましたが、やっと父親に成ることが出来そうです。結婚して二年が経ちますが、その間なかなか子供ができない不満と苛立ちをぶつけてくる妻と、そんなに焦る事ないと宥めるだけで妻の心境を察知しようとしないうちの間で幾度も無駄な衝突を生じてきました。産政塾の初回で個人の今年の目標を考えたとき『子供をつくること』しかないと思い、他には全く思いつかなかった程深刻であった事を思い出します。

出産予定は二〇〇〇年一月。二〇〇〇年 baby はどんな顔で現れてくれるのか楽しみである。しかし正直なところ不安の方が大きい。現在の日本の社会情勢の事もあるが、やはり自分自信が就職した時までの人生設計を特に構想を描く事なく終わらせてしまったのに、自分の子供に理想というものを教えてあげられるかどうかと言う点であろう。そこで産政塾で体験した事を少しでも役立てることが出来れば自分の経験も意味のあるものに出来るだろう。二〇〇〇年という節目で自分と妻と子供との新しい人生の始まりに産政塾が力を貸してくれたと言えたらいいですね。

サラリーマンとしての生き甲斐と言うものが、ようやく最近になって分かった様な気がする。自分の親も同じ思いだったんだろうと思うと改めて感謝する次第です。明日への糧を得られ、さらに大きなサラリーマンとして成長していきたいと考えます。(おしめ替え、きつそうだなー)

さて話の内容は全く変わってしまうが、独身時代は小遣いも気ままに使え、連日パチンコに嵌まることに口を出す人も居なかったが、今やパチンコ店に入る気さえ起きない財布の中身に北風が追い討ちを駆ける様に家路へと足を向かせる毎日である。

そんな僕の余暇の楽しみとして最近始めた面白い事がある。ラジコンカーである。マニア物だと思うかもしれないが（実際、僕も始める前まではそう思っていた）、やりだすと嵌まってしまうのだ。1/10スケールの車体に2st—2cc弱のエンジンを積んだマシンは僕の体にも点火するかのような痺れるサウンドを聞かせて走り出してくれるのだ。エンジンの回転数が分速30000回転あまりにも達した時の独特の音は正にロードレースを彷彿させるものであり、プロポのハンドルを握っている自分を酔わせてくれるのである。

元々職場の仲間に誘われて始めたのだが、今ではすっかり嵌まっているのである。以前からモータースポーツには多少興味があつたのだが、自分の車を改造したりする事も無く（お金かかるし、走りに行く様な若さでもないし）、プレステのゲームでは、コッスを掴めば簡単に出来てしまうのに物足りなさ（迫力、リアルさも不満）を感じている程度であつたので、ラジコンカーは正に打って付けの物であつた。

休日みんなが集まって空き地にコースを造る。テクニカルなコースを造って耐久レースみたいなのをしてみたいが、未だみんなのラジコン操縦テクニックが完全では無いので、クラッシュしない様に走ろう会になっているのが現状である。自分でパーツを一つ一つ組み立てて作り上げたマシンなので愛着が染み込んでいるのだ。

ラジコンカーと言ってもエンジンカーは大人の遊びなので、メンテナンスにはある程度の専門知識が必要である。燃料の取り扱いにも注意が必要だし、走らせる場所も辺りに民家が無い所で行い、他人に迷惑をかけない様マナーを守らなくてはいけない（他人にはただの騒音なのだ）。幸いローカルな所に住んでいるので場所を探すのにはそれほど苦勞もせず、休日一人で練習しに行くことももしばしばある。

メンテナンスで何が難しいかと言うと、やっぱりエンジンの調整であろう。点火プラグの劣化状態、キャブレターの調整、ピストンの破損、点火バッテリーの消耗などあらゆる条件が整っていないとエンジンは掛かってくれないのである。始めたばかりの頃はエンジンの調子が悪くなる原因が分からず、延々と30分ぐらいひたすらスターターを引っ張っていたのを思い出す。今ではエンジンの分解も出来る様になり消耗品の交換には余念が無い。

最近では市販のチューニングパーツを買って取り付け、原形が分からない程に変わり果てているのだが、それに伴い走りが速くなっている訳ではない。マシンのセッティング範囲が広がった分、調整の微妙な違いでハンドドル操作を変えなくてはいけない。（マシンの駆動方式は4駆だがオーバーステアになり過ぎるくらい、エンジンパワーとのバランスが取れていないのが原因だと思う）

いつの日かまだラジコンを飽きずに続けていて、納得いく程にテクニクが上達していたらレギュレーションのあるメーカー主催の大会にも参加したいと小さく夢に思っています。でもそこまで上達出来なくても子供と一緒にラジコンを組み立ててレースをして、余暇を過ごすことが出来れば満足です。

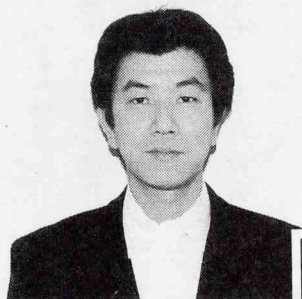
途中から趣味の話になってしまい、又、文章も苦手な為表現がおかしくなってしまった所もあるだろうが、自分自身で産政塾を振り返ってみる機会になった。会社の同僚に産政塾って何と聞かれ、最初は説明に困っていたが、今では是非と薦めたい。

この一年間お世話になった方々に感謝申し上げます。

『パパ不公平』

トヨタ車体労働組合

鈴木 亨



〔プロフィール〕

すずき とおる (39歳)

- 1960年7月 愛知県名古屋市生まれ
- 1979年4月 トヨタ車体株式会社入社
第3製造部（トラック製造部門）配属
- 1994年 トヨタ車体労働組合専従
現在に至る
- 〈家族〉 妻・長女（8歳）次女（5歳）
長男（4歳）
- 〈趣味〉 スキー、家でゴロゴロとする

一、はじめに

第十期産政塾が終了し、提出すべきレポートが大幅に遅れているにもかかわらず、心暖かい産政塾の丹羽氏のフォロー心より感謝申し上げますと共に、塾誌の発刊が大幅に遅れたことに対して関係者の方に多大な迷惑をかけたことに対して深くお詫び申し上げます。

今回の産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう」ではあるが、今回は「自分自身の最近思ったこと」を取り留めもなく書かせてもらうことで勘弁願いたい。

二、家族

現在の妻と知り合ったのは昭和六十一年頃であったと思う。（このような曖昧な言い方をするとはAB型の奥様は非常にご立腹される。）当時、刈谷トラック新工場の製造準備のチームにいた私は、金曜日（多分金曜日だったと思う。）に私から誘ったデート（ここでは私から誘ったと記載する。）で、待ち合わせ場所のサークルKに五時間近く（午後十一頃）も遅刻していった。遅刻した原因は私の仕事のトラブルである。（原因は言うまでもなく私である。）

彼女もそのかいあって、平成元年十一月に私と結婚できたのである。その後、私は長男であるが刈谷にアパートを借り夫婦水入らずで生活し、平成三年に長女、六年に次女と子宝に恵まれ、女の子二人ではあるが、やはり子供は二人が育児・教育などの面から見て「打ち止め」にしたつもりが、翌年の十月に男の子が誕生した。

しかし、私自身長男でありいずれは名古屋の実家に戻らなければいけないのだが、実家には母・祖父・祖母が住んでおり、その祖父・祖母も平成三年と五年に他界したため、平成七年に名古屋の実家を俗に言う二世帯住宅に新築し現在に到っている。

子供を見ていると自分とさおり（妻の名前：妻もやはり一人の女であり人間である。従って、私が妻を呼ぶ時は必ず名前前で呼ぶようにしている。）のDNAが半分づつ組込まれている。子供の挙動等に自分自身を垣間見ることもある。

子供は、瀬奈Ⅱ長女、美葉Ⅱ次女、就Ⅱ長男である。モーターファンならもうお気付きだと思うが、瀬奈Ⅱアイルトン・セナ、美葉Ⅱミハエル・シューマッハ、就Ⅱミハエル・シューマッハである。言い訳ではないがまったくの偶然である。私自身F1には興味があるものの、ドライバーには全く興味がない。

長女の性格は妻（AB型）と似通っており、曲がったことが嫌いであり、口が達者で「ああ言えば、こういう」性格的などころも見られる。従って、使ったものの後片付けなどで妻に怒られていても「ああ言えば、こういう」状態になり、余計に妻の怒りを増幅させる。次女の性格は要領が良いところが随所に見られる。長女が使ったものを片付けで妻に怒られているところを見て、こそこそと（妻に見つからない様）片付け、「自分は片づけたよー」というような性格である。長男については妻も頭を悩ませている。それは長男が現在の名古屋の家で生まれたことである。上の二人は刈谷で生められたため子供を実家に連れて行くことも月に一回程度であり、「おばあちゃん子」ではないが、長男はおばあちゃん子になりつつある。しかし現在に到ってはその心配もないが、妻曰く「取り越し苦労と言

われても気が抜けない。」である。

三、パパ不公平

三人子供が一緒に遊んでいる時、二つしか無い物を三人で使うことになる場合は次のような図式が出来上がる。当然長女は1つ取る。残りの1つは次女と長男で取り合うが、次女と長男は年子のため体格的には長男が勝り、腕ずくで奪い取る。次女は泣いて私のところか妻のところに来てなだめてもらう。従って、家庭の一部しか見ていない私（平日に到っては深夜の帰宅、休日は仕事に出かけることが普通の人より若干多い）にとって次女が不憫だと思うことがある。（妻曰く、あの子是要領が良いからそれほど不憫でもないよ！意外とあっさり言われた。）

ある日の帰宅時、子供が「パパが帰ってきた！」子供がまだ小さい分まだ自分によってきてくれる嬉しく思うことである。いつまで迎えてくれるのだろうと最近つくづく思う。その時のことであるが、三人寄ってきて自分自身では意識していなかったが、次女を抱いた時、長女からも「抱っこして！」といわれ、「後から！」といった時に長女から「パパ不公平！」と言われた。自分自身愕然とした。頭の中でもう一人の自分が「現在の自分自身の仕事は今何をやっているんだ！」現在取り組んでいる仕事は、トヨタ車体の福利厚生施策が従業員全員に如何にしたら「公正・公平」展開できるかである。

自分自身が公正・公平ではないのに、そんな人間がトヨタ車体の福利厚生施策が従業員全員に「公正・公平」に展開できるのか。さすがにショックな出来事であった。その夜、妻にも今こういう事を組合の仕事でやっている。（家では殆ど組合・仕事のことは話さないし、極力妻の話を聞くようにして

いる。」「俺って、三人に公正・公平でないのかな？」妻曰く「そんな事はないよ！瀬奈ぐらいの年代になれば、学校・友達との会話・テレビなどものすごく言葉を覚える。ただ偶然あの言葉が出てきただけよ。考えても見てよ、あの子達は毎日脳細胞が数十万個増えていくのよ、私達は逆に脳細胞が数十万個死滅していくけどね！」と慰められた。

しかし、私には「パパ不公平」と言う言葉が頭から離れなかった。辞書で「公平」を調べてみると「かたよりのないこと。」である。「かたより」は「ある基準からずれて一方による」ことであった。

ある人から言われたことを思い出した。「人は話上手になるより、聴き上手になれ！」このことは「言う。聴く。まとめる」を良く耳にするが、「人の言ったことをまとめ、まとめたものを的確に相手に伝える」ことである。今の自分自身には「自分の思うことをまとめ、人に自分の思うことを伝える」ではないか。自分自身の一方通行で、人のコミュニケーションがない。従って、子供たちとのコミュニケーション（子供達の会話を聞くこと）が少ない私にとって、「自分の思うことだけを頭でまとめ、子供に伝えた」Ⅱ「パパ不公平」ではなかったか。

三月の中旬も過ぎたところで年休が三、五日残っている。トヨタ車体では労使で年休カットゼロ活動を労使で推進しており、現在五年連続で全従業員カットゼロを達成している。（カットゼロ活動とは年休は最高三年間ストックできるが、三年繰り越すと三年目の年休は切り捨てられる。従って、切り捨てられる年休をゼロにして全員公平に年休が取得できる活動。）約二週間の間に週一・五日のペースで取得していた結果、週三日程家族全員で食事ができた。いつもの食事より会話を多く子供に、今日小学校でどんなことをした「幼稚園ではどんなお遊びをした」などを話し掛けたところ、子供

の目が輝いて「こんなことをした。あんなことをした。」など話しかえてきた。コミュニケーションの重要性を再認識させられた。家庭でもコミュニケーションのできないものが、良く会社でコミュニケーションの重要性を伝えられるのかとも考えさせられた。

しかし、自分のモットーとして「いつまでもくよくよ考えるな。間違ったら間違ったで反省し、方向を修正すればいいではないか。(自分勝手な考え方である)」自分自身今後この「パパ不公平」と言う言葉を胸に叩き込んでこれからの仕事・私生活に反映していきたい。

四、最後に

『パパ不公平』と言うテーマで取り留めもないことをダラダラ文字を並べて書かせてもらったが(意味不明なこともご勘弁願いたい。)今回「産政塾」に参加して非常に良かったこととして、私自身七回あった会合に三回しか参加せず、最終回に到っては懇親会(打ち上げ)にしか参加しなかったが(第一回の初顔合わせの時は皆勤賞を狙っていたが……)今回の塾生の皆さんに色々な話が聞けたことに對しては私自身の財産であり、派遣してくれたBW(トヨタ車体労働組合の愛称)に感謝しています。今後も年に二回ぐらい懇談会を設置し、第十期生の皆さんともっと色々な話をしていきたいとも思います。

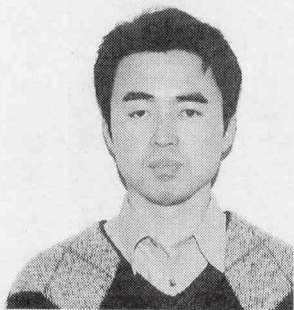
最後の最後に事務局の丹羽様にはレポート提出遅れに對して心暖かい配慮感謝し、取り留めもないレポートを終了します。

貴重な体験ありがとうございました。

ケース・バイ・ケース

アラコ株式会社 特装部

鈴木 康 紀



〔プロフィール〕

すずき やすのり (33歳)

• 1966年 愛知県豊田市生まれ

• 1984年 アラコ㈱入社

(当時、荒川車体工業㈱)

特装部 特装製造室配属

〈家族〉 独身、父、母、柴犬 (1匹)

〈趣味〉 音楽鑑賞

一、はじめに

「殻の外へ踏み出そう」というテーマで始まった産政塾。自分なりに解釈すると、「気持ちの上で、新しい場所に踏み出そう」といった意味であろうか。さまざまな会社・労働組合の方々と共に、いろんな講師を迎えて話をすることができた。私にとって、とても貴重な体験であり、勉強になったと思う。皆さんと、自然に、気さくに話をしたり、聞いたりすることで、文字通り「殻の外（新しい場所）へ踏み出すことができた」と感じている。

さて、この原稿のテーマは「ケース・バイ・ケース」。まず、私の感じていることを書かせて頂き、そのうえでこのテーマに触れたいと思う。

二、ディーラー見学の話

最近、休みの日「ちょっと行ってみようか」と思って行った所がある。それは車のディーラーで、新型車を見に行くのである。ときどき行くのであるが、好きな型としてはワゴンやセダンが好きである。私は、車は長く乗りたい、と思っている。だからディーラーを見学するのは、買い替えを検討するというよりは、「ただ興味があるだけ」、といった感じである。

しかし、数年前まで私は、ディーラーはもっと近寄り難い所だと思っていた。やはり、近いうちに車を買ひ替える予定がなければ、行かないほうがよいのではないかと、思っていた。なぜなら、欲しくなってしまうだろうし、セールスマンにあまり頼まれても困るし・・・といったことが理由であ

る。

そんな時である。会社にY君という後輩がいる。彼は、「数年先に車を買いたい」と思っていて、興味のある新型車が出ると、待つてましたとばかりにディーラーに足を運ぶ。カタログをもらい、試乗もしたりする。セールスマンの、「買い替えのときは、よろしくお願いしますね」という言葉にも、「はい」と、笑顔(?)で答えて帰ってくるという。

新型車等、車を見に行つて来た人の話を聞くのは楽しいものである。私自身「興味のある車だったら見に行つてもいいな」と、感じている。

ちなみに現在の私の車は'95年式トヨタ カムリ。決して若者受けする車ではないが私は気に入っている。

今まで見た車種(それほど多くない)の中で、印象深い車を挙げてみる。まず「プリウス」。試乗したところ赤信号で一時停止したのだから、エンジンが止まってしまった(エンストではない)。これは、停車状態のアイドリングを無くすことで燃料の無駄な消費を防ぐ為なのだ。また発進時は、モーターエンジンでスムーズに発進することができた。それから「ビスタ」。居住性を最優先に考えた思い切ったスタイルに驚いた。少々ずんぐりしているが、居住性はバッチリである。他には「ウインダム」は値段は高いがカッコイイなどいろいろある。

ふと、ここまで書いてきて思う。「興味がある」と「買う気がある」は似ている、と。まあ、でも、これからどんな車が出てくるか楽しみでもあるし、注目していきたいと思う。

三、野球中継にて

今年の中日は強かった。日本シリーズは、本来の力を出せず負けてしまったものの、シーズン中は粘り強く勝ち続けてくれた。私は熱狂的なドラファンではないが、9・30の優勝決定試合はTVの前で熱く燃えた。四点差をひっくり返す逆転勝ち。我が家の隣の飲食店では、試合終了後十数人ほどお客さんが外へ出てきた。一斉にバンザイが始まり、そして一人一人の胴上げが始まった。とてもにぎやかな夜となった。

さてそんな中日であるか、シーズン中のある試合にて、中日は大量リードを奪われ、苦しい展開になっていた。そのとき、あるラジオの解説者が言っておられた言葉が印象に残っている。「良い成績を残すには、後悔を減らしていくことですよ」と。なるほど、そのとおりだと思った。自分なりに解釈すると、たとえ負けそうな試合でも、後悔のないプレーをする。これまでの、又は、今日の後悔を繰り返さない。と、いうことであらうか。自分自身、日々の生活の中で「しまったな」ということはよくある。解説者・選手等の言葉に、ふと自分自身を重ねて考えてみる。そういうひとときも、又いいものである。

四、大きな存在

先日、三好町の名古屋刑務所で行われた「矯正展」という催しに出かけた。ここでは、全国の受刑者が作った、家具等の木工製品・紳士靴等の革製品・民芸品・食料品などが、展示・即売されている。

安くて良くできている、ということ、家具を見に行くことにした。又、「矯正の歩み」ということで、刑務所内での矯正の様子が、掲示物や写真パネルで紹介されていた。その中で印象に残ったのは、「宗教の講義」を、受けることができるということだ。写真パネルでは、宗教の宗派別の講義の様子が、いくつか紹介されていた。

それを見ながら、ある作家が書いておられた話を思い出した。エルビス・プレスリーの曲の中に、「神のみに知られた」という聖歌があるという。

氏曰く、「信仰があると、自分の心は、よかれあしかれ神にだけは完全に過不足なく知られている、という実感がある。神の認識があると、人に理解されることなど最終的にはどうでもよくなる。」と。自分なりに解釈してみると、人に理解されにくい状況であっても、神様、又は仏様、又は空のような大きな存在が、いつも自分を心理的に理解してくれている。そう思えば、少しは気も楽になると思う。

私の家は、仏教である。私は熱心に仏様に拜んでいます、とは決して言えないが、氏の言葉には、なるほどなと感じるところがあった。

信仰が関係していれば、何をしてもいいとは思わない。しかし、信仰が人を支えているという一面があるのだ、と感じている。

五、ケース・バイ・ケース

ここまで、最近感じたことを書かせて頂いたが、共通して言えるのではないか、と思うことがある。

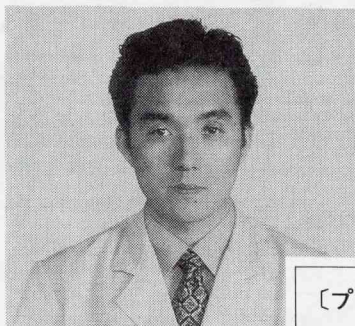
まわりの状況や、自分の力等を判断して、いけそうと思うなら進む。又、ちょっと調子悪いなと思えば退守する。

つまり、「ケース・バイ・ケース」といった、柔軟性が大事だなと思う。

恵まれた環境・人の中で、毎日無事に生活している私。人と和する事を大切にしていきたい。又、仕事・プライベート共に、柔軟性を持ちつつ、自分を高めていきたい。

最後に、この産政塾の一年が、私にとってとても良い経験になった事を記して、講師・塾生・事務局の皆様感謝致します。

親



デンソー労働組合

高橋 勝 将

〔プロフィール〕

たかはし かつまさ (33歳)

- 1965年 12月28日 北海道室蘭市生まれ
- 1984年 日本電装㈱ (現在㈱デンソー) 入社
- 1998年 デンソー労働組合執行委員
現在に至る

〈家族〉 妻、長女(小6) 二女(小4)
長男(小二)

〈趣味〉 テニス・釣り・カーデニング

まえがき

とうとうこの日が来てしまった。私は子供の頃から、その日の前日にならないとなかなか行動に移す事が出来ない性格なのである。悪く言えば、計画性が無い、くずな性格なのである。学生時代ではテスト前になるとクラブ活動も停止期間となり、一週間はテストの為に勉強ができる期間が設けられていた。しかし、勉強しなければと思っても、「まだ日はある明日からやればよい」と考えてしまふ。そして次の日がくると、「まだ日はある明日からやればよい」と考えるその繰り返しで、とうとう前日にならないければテスト勉強をする事が出来なかった。そして今まさに、同じ様な事をしている自分がここにあるのである。産政塾へ入塾する様上司に言われ、先輩にその様子を伺った時から一番気掛かりにしていた塾誌の原稿の提出時期が近付いて来てしまったのである。一ヶ月程前からどんな事を書けば良いのか頭の中で少し考えては見た。同僚にも相談したがなかなか考えはまとまらず、結果は、やはり締め切りが間近になってキーボードを叩いている。

小学生の頃、私は作文を書くのが好きだった。(今は大嫌いだ)例えば、物語を作る事などである。ある島での出来事を自由に書くというものだった。島の形、登場人物などストーリーを自分で考え作文していくものだった。私は友達と競い合いながら原稿用紙の枚数を積み重ねていった事を今でも鮮明に覚えている。その時のように、すらすらと書きたい気持ちはあるが、なにせ文才の無い私なのでどうなるか分からない。とにかくテーマを決めたので書かせて頂く事にする。

この先、偉そうな事を書くかもしれないが、私は、学者でもなく、評論家でもない。産政塾に参加

させて頂いたただのサラリーマンである。何でもありありの産政塾だから書ける事で、こんな意見もあるんだと言う位に思っ頂ければ幸いである。

人 格 形 成

この世の中、完璧な人間という人はいないのである。自分は完璧だと思っいても、きっとどこかに抜けがあるはずである。でも、人は変わる事が出来るし、変える事が出来るのだと思う。それは産政塾で勉強させて頂いて改めてそう思っった。今回の産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」には、そんな意味も含まれていると思う。例えば、性格を変える事もその一つではないだろうか。根暗で引っ込み思案な人でも明るく活発に行動出来るようになるように……

生まれてきた時にはすでに、人格は形成されていると言う人がいる。確かにそうかもしれない。しかし、育った環境が大きく左右するのだと私は思う。ではどこで人格が作られるのであろうか。まずは家庭だろう。子供を育てる時、人格を作ろうと思って育てている訳ではないと思うが、家庭の環境が子供の人格形成に大きく左右すると私は考える。家庭の環境とは、家の大きさや金持ち、貧乏という事ではなく、親が子供に対して行なわなければならない一番大切な事。それは愛情を持つて子供に接するという事である。しかしただ単に、猫可愛がりすれば良いという訳ではない。人として生きていく為の基本的な事を身に付けさせる事、しつても大事である。

しつけをするには、する側が大人でなければならないが、最近は大大人になっていない親が沢山いるのではないかと思う。大人になっていない親から仮にしつけられたとしても、それは結果的には、し

つけられていないのである。そういう子供たちが増えているように思えてしかたがないのは、私だけであろうか。ここ数年、少年犯罪が増加しているが、それもそのせいなのか……。

挨拶

少年犯罪だけでなく、近頃は、物騒な事件が多い。大人になれなかった大人の犯罪と言えるのではないだろうか。私も三人の子供を持つ親として、それなりに考え、しつけをしているつもりである。例えば挨拶は、言われているのではなく、自分からするものだという事。これは、大変大切な事なのだという事をいつも言っている。たまたま部屋を掃除していた時に見つけた高校時代の生徒会誌に私を作った詩が載っていたので少し恥ずかしいが、紹介したいと思う。

あいさつ

機械二B 高橋 勝将

朝、汽車に乗る

一つのあいさつを交わす

この一言が、この一言が今日の気分を明るくする

教室に入るや

「おはよう」

この一言のあいさつで、一日がなんと楽しくなることか

下校時となるや

「また明日……。」

この一言が明日への希望をふくらませる。

小さな心づかいにも

「ありがとう」

この一言を忘れぬならば、

どんなに人の心をなごやかにするだろう。

あいさつ。あいさつ。

たった一言のあいさつの

なんと尊く偉大なことか……。

人として生まれてきたからには、人として生きていかなければならない。人と人との交流は、まず挨拶からだと思う。近所付き合いが下手な人でも、会社がつまらないと言っている人でも、変えられるはずである。声を出して一言言えば「おはようございます」と、きつと変わるはずだ。

言葉を使える動物は唯一人間だけである。その人間だけが出来るコミュニケーションの方法、それが挨拶だ。しかし最近、挨拶がろくに出来ない人が多い。人間関係で悩んでいる人も多いようだ。揚句のはてには通り間殺人が横行したり、自殺する者までいる。その者達は、世間や社会が悪いからとほざいている。それは言い訳に過ぎない。「何ぬかしとるんじゃ」と私は言いたい。「おまえ達こそ

世の中を暗くしているのだ」と…。

体 罰

確かに世の中変わったかもしれない。しつけ（教育）の為に子供をぶてない親、教師。逆に親や教師を殴る子供。私は、親父によく叱られ殴られた。学校の先生にも殴られた。木刀で尻を叩かれた事もある。その時はとても痛かったし、悔しい気持ちにもなったし、泣いた事もあった。けれど、それを恨んだりした事はなかった。なぜ自分が叩かれたのかが分かっていたからなのかもしれない。親父に殴られ落ち込んでいると、しばらくしてから親父は必ずと言っていいほど、私に優しく声をかける。その時は、叱られ殴られた時よりも、もっと泣けてしまった事を今でも覚えている。愛のムチだった。体罰はいけないと言われていた時代だが、私は時にはそれが必要だと考える。但しそれは、せっかんであったり、我武者羅にすぐ殴ればいいという訳ではないが。

親や学校教師から愛のムチを受けた事のない子供は、その痛みを知らない。それだけのせいではないだろうが、ナイフで人を傷つける馬鹿者や自分の子供にせっかんする馬鹿親が多くなった理由の一つではないだろうか。

（今回の産政塾の井2『暁学園園長 祖父江文宏氏を訪ねて』に参加できなかった事を残念に思っている。また違った意見も持てたかもしれないから）

親のねがい

昔に比べれば、みんな一緒なかよしこよしの時代ではなく、個々人の時代といえるのかもしれない。しかし時代がどのように変わり、人々の価値観がどのようにに多様化しようとも、決して変わる事のないのは子供を思う親心であろう。（せっかんする馬鹿親意外は）「このような人間に育ってほしい」、「このような人間になってほしくない」、どの親も抱いている願いではないだろうか。

これも見つけた高校時代の生徒会誌に載っていたので紹介させてもらう事にするが、これは、その当時に行なった高校生をかかえている親が自分の子供に対してどのような願いや期待を持っているかという父母の意識調査のデーターである。

自分の子供が「どのような人間に育ってほしいか」との設問に対し上位三項目は次のように回答していた。

- 一、 気がやさしく、他人に思いやりのある人間。
 - 二、 明るい性格で、誰からも好かれる人間。
 - 三、 どんな環境にも耐え、たくましさのある人間。
- という順になっていた。また「このような人間にはなってほしくない」という設問に対しては次のように回答していた。
- 一、 無気力で、何をやっても長続きのしない人間。
 - 二、 欲が深く、自分のことばかり考える人間。

三、調子がよく、正義感や誠実味のない人間。

という順になっていた。この調査をしたときから、二十年近くたっているがやはり時代が変わっても、子を思う親の気持ちは変わらないものだと感じた。

あとがき

何を言いたかったのか自分でも分からないような文章になってしまい、申し訳なく思っている。恥ずかしくも詩まで載せてしまつて……。

第十期の産政塾が閉塾してから思った事は、全ての活動に参加できなくて残念だったという事だ。特に暁学園の祖父江先生のお話は聞いてみたかった。（業務の都合で仕方なかったのだが……）又、塾生の全員の方ともゆっくりと懇親を深める事が出来なかった事も残念であった。

井5に参加した時は「あれっ」と思った。男ばかりで（むさ苦しく）始まった第十期の産政塾に、女性がいいたのである。私は、「誰だろう」と思っていたら、事務局より紹介があった。その女性は井4の時の講師で中国人の常兆（ジョウチャウ）さんとの事だった。私は、井4にも参加できなかったのでも、知らなかったのである。彼女は講師を務めた後、特別塾生となって私達と一緒に産政塾で勉強をした。とても日本語の上手い、楽しい中国女性だった。男くさい中に花が添えられ、和やかさが増したと十期生は皆思ったのではないだろうか。

最後に中部産業労働政策研究会の丹羽様、思うように出席が出来ず大変ご苦勞をお掛け致しました。本当にお世話になりました。ありがとうございます。

『自分に誇れること』

トヨタ自動車株式会社 人材開発部

丹 下 隆 吉



〔プロフィール〕

たんげ たかよし (37歳)

- 1962年 名古屋市生まれ
 - 1981年 トヨタ自動車株式会社
教育部配属
 - 1984年 第3技術部へ異動
(試作車両加工、組付け担当)
 - 1991年 人材開発部へ異動
(技能五輪訓練指導担当)
- 現在に至る
- 〈家族〉 妻と愛犬(シベリアンハスキー7歳)
- 〈趣味〉 最近は愛犬と散歩すること

小学生のころ手先が器用だった自分は、将来手に職を持ちたいと考えていた。絵の勉強をしたり、習字やそろばんを習ったり、ピアノを習ったりと、ほぼ強制的？に母親に行かされたおかげで、手先が器用になったわけだが、自分がやりたい事は何なのか……。将来の夢は？、何になりたいか？、と聞かれても答える事が出来ない自分を情けなく思う中学時代であった。

ただ、そのころテレビでは、日本記録にチャレンジノとかで、いろいろなスポーツとか職人さんみたいなのに挑戦して「日本新記録・日本一」になる人を毎週見ていて、自分も何か日本一になりたいなあ……と、ふと、小学生のころ将来手に職を持ちたいと考えていたことを思い出した。

中三後半の進学か就職かという時期に人生の岐路？に差ししかかって出した結論は、就職だった。中学の恩師はトヨタ自動車㈱をすすめてくれた。よし、手に職を……というより、何か技能を身につけよう。高校で勉強、そして大学に進学するのも性に合わないし（正直な所、勉強が嫌いだった）一代決心して入社試験を受け、これが受かってしまった……。といっても、トヨタ自動車の企業内学校で、トヨタ工業高等学園に入学し三年間、働きながら、高校の資格を取る所で、全寮制の非常に厳しい訓練が待っていた……。どれだけ厳しいかと聞かれても言葉で言い表すことができないので省略させていただくことに（聞きたい人は実際に合ってお話を）して話を戻すと、どこまでだったかな？そうそう、入学してから一年間はみっちり学問を勉強し、二年生から仮配属で職場が決まるわけだが、この時人生の岐路にまた遭遇してしまった。大袈裟かもしれないが自分の将来の職場が決まるわけで、ただごとではない、この時に自分のやりたい仕事は何か。よく考えたが小さいころ思った「何か技能を身につけたい。日本一になりたい。」と言う思いから技能五輪を選ぶ訳だが、簡単にはなれない。当

然、選考試験があり、器用さ、素質、性格、成績等、クリアしなければならない訳で、一生懸命選考試験をがんばった。器用さにかけては自信もあったし、合格する事が出来た。

選ばれた職種は『曲げ板金』で、簡単に説明すると、一枚の鉄板にけがき線を入れ、金切り鋏を使って切断し四角や丸い形に、数個を曲げ、ガス溶接で組付けるもので、家庭にある、換気扇のダクトと言えば理解してもらえらるだろうか。空調関係のエアダクト・集合管と呼ばれるもので、製作時間、寸法精度、外観（見た目のきれいさ）を競技するものです。他に旋盤、フライス盤、木型、電子機器組み立て等七職種に当社は参加しており、全国大会では建築大工、建具、左官、洋裁、精密機器組み立て、美容等々たくさん職種があり、技を競うものでいわゆる職人さんのオリンピックに挑戦することになり、誰よりも早くメシが食えるのとは訳が違う（こう言う言い方すると誤解を招くかもしれないが）、まさに、「日本一」と自分に誇れる事を見つけた。

日本一の次は世界一を目指すことが出来る。訓練を始めたころは非常に軽い、簡単な理由で始めたが、実際のところは非常に厳しく、人間楽して結果が望めない事がよくわかり、事の重大さに気がついた。かなりのんびりしている性格の私は、それこそ産政塾のテーマにある殻の外へ踏み出さなければ、日本一はおろか、県大会ですら通過できない状況に追い込まれていた（この塾誌の締め切りも追い込まれている……）。事実、最初の県大会は通過できず、全国大会にはいけなかった。ある程度、器用だった自分が通用しなかったことが悔しく、又、情けなかった。つまり、センスが無かった事になる。ただ、努力すれば何事も成せば成ると言う精神で、毎日それこそ体力も気力も精神力も充実していなければ何も成果が得られない世界に身を投じ、余計な事（雑念？）は考えず、同世代の連中は楽

しく青春を送っている姿を横目で見ながら、心の奥で叫んでいた「今に見ている／必ず日本一になってやる／」と、ただひたすら技能五輪に掛けてみた。

今思うと、この時は、殻を破るどころか自分の世界を作ること集中していた気がする。まったく産政塾のテーマと正反対の殻に閉じこもり一つの事に集中していたかもしれない。あまりに不器用な性格の為か同時に二つの事がやれないのが、今でも痛切に感ずる。こう言う時こそ殻の外をみるべきなのかな？と思う。

さて、技能五輪はと言うと、努力？のかいあって、運にも恵まれ念願の日本一になれば、その年の国際大会への出場の機会も与えられた。二十一歳の時である。声を大にして言いたかった。「俺は日本一だ／」、でも心の中に自分に誇れることとして閉まっておこうと思う。技能五輪というと、メジャーではない、ほとんどの人が知らない「それって何？」と、当時、付き合い出した妻が言う。さみしい…。でもいいか。

さてと、国際大会では貴重な経験をさせてもらいました。当時、二七職種の日本一が参加し、世界からオーストリアに集結、技を競い合った。それこそ、飛行機に乗って現地に入るのに三十時間以上もかかり、世界の大きさ（空港での乗り継ぎの不便さ？）にまずビックリ。実際に各国の選手たちを見たときはさすがに、背が大きい／、本当に年は同じなのか？、と思える程、老けた奴もいる。（国際大会は二十一歳までの年齢制限がある）だが、一番の障害は「言葉の壁」である。英語、フランス語、ドイツ語、ポルトガル語、広東語等々、唯一話せるのが日本語の私は大変困った。中学の時にもう少し勉強しておけば……。後悔とはこういうことなのか？。しかし、現地はドイツ語で、まあ、英語を

話せても今回は何も通じないから後悔することないか、なんて自分に言い聞かせているあたり、違う自分を見たような気がする。

何やら昔からよく言う「かわいい子には旅をさせろ」だったかな？、この国際大会でいろいろな国の人と交流でき、考え方、価値観の違いを体験できた事が大変よかった。韓国、台湾の選手たちはお国事情が違い、彼らの目つきが違う、国がバックアップしており、優勝すれば将来の生活は保証されるとか、家がもらえるとか、本当かどうか不明だが……。逆に欧州の選手は友好的で、お祭り好きで、非常に対象的であり、日本はどちらかというと、プレッシャーを感じやすく、世界で活躍する日本人が少ないのは日本人の特質なのか？、もっと外へ、海外へ目を向けなければ、日本も、企業も、ダメになる。とはいふものの現実には、何かと仕事が増え、毎日がつつかれています。とても世界を見ている余裕がないのは私だけだろうか？。

国際大会に話をもどすと、言葉の壁を身振り、手振りでなんとか乗り切り、日の丸の重圧？にも負けず、ここでも運よく三位に入賞でき、始めて曲げ板金に参加した当社にとって良い結果となった。欲を言えば優勝したかったが、韓国、台湾には勝てなかった。（自分が土台になり、後に続く後輩に期待することにして）実際は悔しくてとにかく一番になりましたがこれが自分の実力なのだ、上には上がいる、現状に満足していたら足元をすくわれる、井の中の蛙ではだめだ。そう言う意味では、この経験は世界を見ることが出来てよかった。現在、自分の後輩を指導する立場にありますが、最近技能伝承とさかんに叫ばれており、いわゆる、カン・コツの世界をどう定量的に伝えるか、悩んでいる状態です。

長野で角皆氏（フリースタイルスキーヤー）の話の中で印象に残っている言葉が「和する」です。（塾生の方は、ご存知であろうかと）合気道を学んだその中で、得たことが、周りの空気、気の力に自分を合わせる事。もしくは感じる事。らしくその時はフンフンと聞いていたが、長野から帰って指導する場面では、その場の雰囲気を感じ、自分もその中へ入ること。若い人の雰囲気、ちょっと上の人の雰囲気とそれぞれある事に気がつき、こう言うことなのかと思いました。（本当の解釈は違うかもしれないが）その場の雰囲気に馴染む事が大事で、一方的な指導では何も進展がないことがわかった。コミュニケーションの大切さを感じる毎日です。

産政塾ではたくさんの講師のもとへ邪魔して、それぞれの生き方、価値観の違いを見せてもらいました。好きなこととして生活をしている、サラリーマンの私からすれば、なんと羨ましいかぎり。いや、好きなことへチャレンジする勇気が無いのが今の自分なのか。

名古屋の考現学を研究しておられる岡本夫妻の視点（見方）の違いを痛感させられた。普段何気なく見ている風景も、少し視点を変えるだけでなんと世界がひろがるのか。子供の気持ちを知るには、子供の目線で見なければ、わからない。大人の目線で物を言っではいけない。仕事の見方、視点を変えてみよう。もっと視点を、時には高く、時には、低く世界を、家庭を見ていこうと思う。そして、和することも忘れずに。

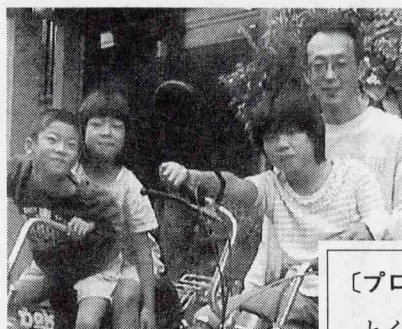
そろそろ、まとめに入ろうかと思うが、結局なにが言いたいのか、さっぱり自分でも分からなくなっている。多分、もう夜明けが近いせいだろう。今、自分に誇れることが、これを読んでいる諸氏にはあるだろうか？。少なくとも、私はある。だが声を大にして言うことではないし、たいそうな

人間でもないので、心の奥にしまっておこうと思います。

いずれにしても、七回の産政塾ではたくさんの塾生と知り合えたし、勿論、貴重なお話を聞かせてもらった講師とも知り合えたことは、今後の宝となるであらうし、今回の体験を後輩たちに聞かせてあげたいと思っています。

最後に、事務局の方々には、大変、迷惑をかけたことを、この場を借りて謝りたいと思います。今後とも交流を持ち続けたいと思いますので、よろしくお願いします。

最近思う事



アスモ株式会社 人事部教育

徳 増 達 生

〔プロフィール〕

とくます たつお (39歳)

- 1960年 7月25日 静岡県 新居町 (浜名湖西岸) にて生まれる
- 1979年 アスモ株式会社入社
日本電装学園 (現 デンソー) 高等専門課程入学
- 1980年 工機工場機械課配属
- 1982年 日本電装学園 (現 デンソー) 出向
- 1983年 工機部技能教育課
 - 1991年 9月 産能短大通信教育課程卒業

現在 人事部教育

〈家族〉 妻、長女、次女、長男、父、母

〈趣味〉 バイク収集及び修理、ごそごそ動くこと

はじめに

一月に始まった産政塾も今回をもってすべて終了してしまふ。(残念)

当社から塾生としての参加が始めてであったこともあり、嬉しさの反面、会社の看板がいつもついて回るといふプレッシャーを感じずにはいらなかった。

「なんでもありーの」の精神で「殻の外に踏み出そう」といきなり開塾式で言われ「何をすれば良いのであろうか」とア然とし考えさせられたのが第一回目で昨日のこのようである。

二十年前、学校の先生に薦められ入社、会社の推薦してくれた親会社内訓練校での一年、会社の決めてくれた配属とその後の職場移動、そして上司の敷いてくれたレールの上を機関車に引っ張られるごとく今日までに至った。

この間に培われた習慣とか常識とか、生い立ちも大きな影響をしていると思うが、自分の経験により得たへんな自信がいつの間にか「殻」をつくっていないかと反省する。自分を含めまわりの多くの人たちは、自分の小さな成功体験も長い年月の間に記憶の中で誇大化されインプットされているという習性があるようで、「昔はなー」「今の子はなー」という表現に変わっていく。それが個人のバックボーンであり、存在価値のように考えるようになってはいないであらうか。

会社生活、人生の折り返し地点に近づいてきた今、今後についてこの紙面を借りて述べてみたい。

鍛える場所を失いつつある中学生

昨年より自分の住む町のボランティアとして、“町民の生涯スポーツの指南役” 目的で体育指導員たるものを引き受けている。この活動の一貫とし、自分が危惧していることがあり少し触れてみたい。中学校での運動部活動の廃部である。中学生は子供から大人へと成長する過程の中で、“人間関係、体力・精神力等” 様々な事を部活動という一種の拘束されたスポーツの中で学ぶ重要な意味を持っていると考えているし自分もそうであったように思う。この部活動が今、廃部になるケースが多くなってきていることである。

廃部になるメカニズムは、

- ① 指導者かつ教員である人数が生徒数に比例するために、少子化と平行し減少する一方である点。
- ② 公務員扱いの教員の転勤を機会に、新入生の入部を打ち切り、自然消滅するもので、代わりのできる教員がいなくなることに由来するもの。

- ③ 新採用の抑制からくる教員の高齢化である。今の教員は四十代が中心といわれ、運動部の指導は体力的にも厳しい。過去、指導経験のある競技ならば、なんとか務まるが新たに知らない競技を指導することは現実的に無理がある。

今日における状況であるが、この先五年、十年後の状況は近年の出生率を見てもはっきりとしている。

この問題を解決しようとあちらこちらで動きだしている地方自治体もいくつかある。その代表的な動きは、

① 学校長がその競技に長けた指導者を周囲及び、父母のなかより選任するという、学校単独による活動

② 市町村が指導者を募り登録し、要望のある地域、学校に派遣するという活動

③ 部活動そのものから脱皮し、地域のクラブへ移行するという活動等、様々な方法を模索中なのが実情である。

この問題に、自分が主体となって提起することはできないにせよ、我々の後継者としての今の中学生の育成を支援していくのは大人の役目であることに違いない。自分自身、専門指導者にはなり得ないが、指導者をサポートすることは可能であろう。

自分たちの子供がこの年代に差しかかろうとしている今、親子で同じスポーツに打ち込める状況というものは素晴らしいことではなからうか。

モノを大切に

日本の製造業は大量生産で「安く・良いもの」を作り出し企業が発展し、国民はそのおかげで「豊かさ」を享受し今日に至っている。その「つけ」とも言うべき現象について触れてみたい。

自分が、地元の粗大ゴミ処分場へゴミを処分に行ったときのことである。まだまだ使用できると思われる家具類、自転車、電化製品等々。まるで中古品を扱う百貨店。

自分が中学に入るとき、親にやっとの思いで買ってもらった自転車は当時五万円、今なら安ければ一万円を切っている。結婚した時に購入したビデオデッキは十八万円、今なら二〜三万円程度。結局、直すより買ったほうが安く、新しいものが使えるというわけで粗大ゴミ処分場はあふれだしている。

この現象は、自分にとって「宝の山」というわけだ。一例をあげると娘の自転車である。程度の良いものをベース車とし見つけ、カゴ・サドル・ベル等、ドライバー・スパナ持参により買い物感覚で一台中の完成車となる。もちろん「ただ」である。

これを見た娘は「お父さんはケチだね」と言う。「ケチではない、使えるものは使ってあげないともったいないだろう」……というのが、親子の会話であり、子供への大きな「躰」であると自負するとともに楽しんでもいる。（表紙の写真のバックに写っているラティス（鉢かけ）と枕木の組み合わせも無料でいただき、子供と二日間かけて完成したものである）

「新品を購入しないという点では消費に貢献していない」とも言えるが、オイルショックの時、仕事のなかった父親（個人商売を行っていた）の姿を思い出すと「使えるものは使う」「モノは大切にする」という感覚を身を持って体験した。是非、子供たちに教えていきたい精神であり実践を通じて学ばせたいと考える。

モノをつくる楽しさ

男の子に生まれた人ならば、その昔「プラモデル、木材加工、ペーパークラフト」など、自分で考えたり工夫したりして遊んだことを経験してきたことがあろう。

十月に静岡県で実施された技能五輪全国大会の特設会場にモノづくりを体験するブースがあった。

“竹とんぼ、竹馬”づくりを行うコーナーは子供が中心で、子供の親らしき大人たちも真剣な眼差しで加工をしており、活気に満ち溢れていた。

また、地域の方々、小中学校を巻き込んだアイデアフェスティバルという当社のイベントの中で、小学生に人気の高かったものに“ミニ四駆コーナー”があった。思い思いに自分のマシンをチューニングし〇・一秒でも早く走らせるための工夫、改造を行っているのである。中にはモーターをばらし、コア（モーターの回転早さを決める回転部）に巻く銅線をばらし、自分で巻き替え最速マシンを造ると意気込んでいた中学1年生を目にした。驚きであったとともにモノを作り、結果を楽しむことを“飯よりも好き”と言わぬばかりに熱中する熱きちびっこたちに感動したのを覚えている。

このような子供たちが“モノづくり”に熱中できる“場”を作るのも今からの大人の仕事ではなからうかと思うのである。

ある雑誌に最近の新人技術者はコンピュータによるシミュレーション技術には興味を持ち理解も早い、機械加工や組立て等の経験がないため図面は書くが、机上の空論に終わる場合が発生するというような主旨の記事が掲載されていた。実例をあげると、CADによる設備設計者が組み付け方法を知らなかったため、ボルトを締め付けるスパナの入るスペースを確保せず、図面はできたが形にはならなかったというケースがあったと聞く。その昔、モノを作ったりいじったりした経験のある者ならば経験的に理解できるようなイージーミスではなからうか。

このような設計者に現場での設備の使われ方を教え込もうと、あえて教育カリキュラムを作り現場

訓練を実施している企業もある。「現場での使われ方を知らなければ良い設計はできない」という考えに基づくものであろうが、問題は設計者が「モノをつくる現場」に興味を持たなければ「ただの教育」に過ぎないのではなからうか。いや、「仕事だから覚えること」なのか疑問が残るところである。ファミコン時代に育った若者が増える中で「モノをつくる喜び」を知らないまま育った世代が主流となる今後の製造会社を想像するとその将来に不安は隠せない。

やっぴん

日頃感じている事にペンを走らせてみたが脈絡のないことをずらずらと平気で書いたなと感じる。しかも、中身は仕事の延長線での内容であることに、自分自身「どっぶり殻のなか」なのかもしれないと反省しきりである。

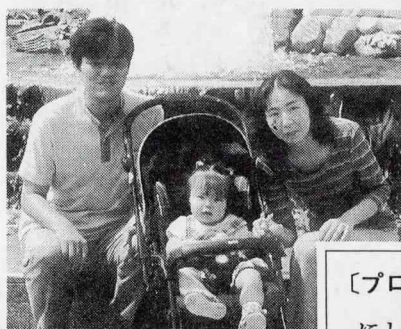
入社以来、技能畑を歩き（今後もそのつもり）現場経験者にしかできないこともたくさんあることがわかってきたような気がする。今回述べさせていた内容に対し、実行する必要性は感じないが「何か行動を起こさなければ」という、自分に対するプレッシャーのようなものは感じる。これが適度に働いているうちは「自分で殻を突ついている」時であると思うこととしよう。

人間として生まれ、「良き社会人として」その責任をその人なりのやり方で果たす必要があるとするならば「自分にできること」はこの範疇のことであらう。

男、三十代 いっちゃやらまいか!!

第十期の産政塾の皆さん、中部産政研の丹羽さん、初参加企業ながら、図々しくいつも大きな顔をしていたことをお許しいただきたい、そして一年間ありがとうございました。

半生を振り返る



丸栄労働組合

西 井 俊 哉

〔プロフィール〕

にしい としや (33歳)

- 1966年 東京都 生まれ
 - 1989年 株式会社丸栄入社 紳士セーター売場に配属
 - 1999年 労働組合専従 現在に至る
- 〈家族〉 妻 (冬子)、長女 (桜 1歳 とってもかわいい=親バカ)
- 我家は季節感で一杯である。次は夏雄かな？

〈好きな言葉〉 “千里の道も一歩から”

〈はじめに〉

何とも大層なレポートの題をつけてしまったものだと思き始めて正直、気が遠くなってしまうが、いまさら題を変えるのも何かと思い、これを機会に今までの人生を振りかえり整理をしてみようと思う。当然33歳という今の年齢で生き方について語るなど人生の先輩から言わせれば「笑止」であると思う。しかし笑うことは許さない。自分の半生を振り返り、そして今自分の生き方について考えることは今の自分にとって大切なことであるから。

〈小学生時代〉

私が生まれたのは、東京都三鷹市。父の仕事の関係で今までに四回の転校を経験した。転校する寂しさというのは経験した人間にしか分からないものであると思うが、私は寂しさ半分、楽しさ半分でどちらかといういつも新しい生活に対してわくわくしていたような気がする。

小学生の頃の私は、どちらかというと「お調子者」で学級委員や児童会の委員の選挙などがあり、『お前出てみろよ』と言われると出てしまうような子供だった。また毎日学校が終わると近所の空き地で野球をしたり、近くの池でザリガニ取りをしたり一度家を出ると日が暮れるまで絶対に帰ってこないとにかく外にすることが好きだった。

自分がどういう子供であったかと他人に向かって紹介することは恥ずかしさで一杯であるが、私は友を「仲間はずれにする」ということが大嫌いであった。遠足で母親に作ってもらった弁当を広げて

仲良しグループで集まり食事をとる光景がある。みんなでそのお弁当を広げ、好きなおかずを取り替えたりするあの光景である。ある友人が、弁当ではなく菓子パンを二つ持って泣いていた。どのグループにも入らず、そして誰も声をかけない、そんな光景だ。今も強烈に心に焼き付いているシーンであるが、私は社会の不合理さと人間は平等ではないという哀しさをその光景から子供ながらに感じ取ったそんな気がする。

通信簿の所見の欄にはいつも“落ち着きがなく感受性が強い”と書かれていた。落ち着きがないということに対しては今でも十二分に理解するところであるが、感受性が強いということについては本当にそうだったのか、今の私にははっきりした記憶がない。

その頃の作文で書いた覚えがある。作文の題はありがちな将来の夢である。プロ野球選手、総理大臣など今からは想像のできないような大きな夢をみんながそれぞれ持っていたが、私の将来の夢は“弁護士”であった。何か弱い者を助ける強烈なイメージがあり、結果として今の自分とは全くかけ離れているものの小学六年生で日本国憲法の豆本を買い、暗記をしていた覚えがある。

ああ、いつから私も含めてその夢をみんなは捨て去ってしまったのだろう。

〈中学生時代〉

中学校に進学すると、バスケットボール部に入部し、毎日日没までボールを追う青春を繰り広げていた。またおだてられて生徒会の活動にも積極的に参加し、三年間生徒会の執行部にも在籍した。(考えて見れば今自分が労働組合の執行部であることもこのとき既に運命として決まっていたのかもしれない)

ない。)

強烈な記憶がある。バスケットボールの大会であったが、引退のかかった三年間での最後の試合である。中学校の部活動にしてはかなり本格的な練習を進めていて夏休みはほぼ毎日、朝から晩まで練習に明け暮れた。試合の間際まで私は体調を崩し練習を休んでおり、最後のこの大会の前日によく熱が下がり、ぎりぎりまで試合に間に合ったそんな大会だった。最後の試合で思うように体の動かない私を最後まで監督は使ってくれたが、結果34対35と僅か1点さで負け、悔し涙で前が良く見えなかった。試合に負けたことは勿論悔しかったが、自分の力を出しきれない、力一杯戦うことができなかった自分が悔しくてならなかった。

また世間では校内暴力が問題になり始めていた頃で当校でもそれは例外ではなく、弱い者いじめをしている“つっぱり”君たち(ふっ!古い)が校内に結構いて、彼らの世間や大人に対する不満については理解できる部分もあったが、“弱い者いじめ”、それだけは許せなかった。中学生といえども一人前の人間であり、ものの分別のつく年齢である。自己の不満を何の関係もない別の人間を巻き込み、また対象にして“うさ”を晴らすなど、常に自分を中心としたその考え方、人間として心の痛みを全く無視した振るまいをどうしても許せなかった。暴力では何も解決できないことは理解しているものの、その光景が我慢ならず見かねて殴ったことがある。翌日、数人に待ち伏せられ、いわゆる“お礼参り”を頂戴したが、屈してしまうのは嫌で最後まで殴られた。

最近ではいじめられて自らの命を絶ってしまう悲しい報道が日常茶飯事である。苛められる側にも問題があるとの議論もあるが、それはおかしい。さらに腹立たしいことはそれを黙ってみている人間

が、いること。自分に関係ないことであれば全く興味が無いという今の風潮はどうしても許せない。

〈高校生から大学生・就職へ〉

高校生になると毎日何故かイライラしていた。多感な時期でもあり、格好良く言う自分のエネルギーの持つて行き場に毎日悩んでいたのかもしれない。自分が今何をしたいのか、何をしなければならぬのか、良くわからなかった。確かにそれは「甘え」であったと思う。しかし小学生、中学生時代のどちらかというと純粹に物事を正面から見ることができていた時代とは違い、物事を斜めから見、何をしても充実感の味わえない虚無感を感じていたことは間違いない。

教師に注意されれば反抗し、この世代の人間であれば誰でも経験するとは思うが、両親をも鬱陶しく思っていた。

そして大学に進学してはみたものの、それは一般の学生と同じように遊ぶお金欲しさにアルバイトに励み、授業も出たり出なかったりという具合だった。将来の目標と言っても何か明確な目標を持っていたわけではなく、ただ漫然と毎日を過ごしていた。今から考えるとうらやましい限りであるが、時間ばかりはたくさんあって、今のままの自分で良いのか、常に自問自答を繰り返し、情けなさで憤懣やる方なしだった。片っ端から本を読み、自分の生き方について考え、時には共感し、時には反感を持った。

就職活動は、活動をはじめめる段階から流通業界に決めていた。自分のやりたいことは何だとして余した時間からたどり着いた一つの結論であった。私が入社した頃はバブル経済の終焉を迎える直前で、

売上も右肩上がりで伸びていた頃だ。それから十年、自分なりに仕事に対して考え抜いた結論に対して後悔だけはしないと心に決め、一生懸命取り組んできた。(つもりだ。※たまにさぼった) 転機が訪れ、私は今、労働組合にいる。

〈今の私〉

いろいろなことを書き連ねてきた。なんだか暗い話になってしまったが、それぞれの私がある時々で感じたこと整理をし、今までの自分はどうだったのかと改めて考えてみると、何だか笑えてしまう。しかし、その時代にはその時々で真剣に、一生懸命考えたのだなと恥ずかしい話ではあるが、自分に感心してしまった。

さて今の私はどうであろう。あの時代に持ち合わせていた、あの正義感やひたむきな情熱、あらゆる物事に対する好奇心を持ち合わせているだろうか。うれしいことに喜び、悲しいことに悲しさをそれぞれ表現しているのだろうか。毎日が何かルーティンのように漫然と生きてはいないだろうか。残念ながら、自信を持ってそんなことはないと言い切ることはできない。そんな思いをここ数年、漫然と感じていた。

ちょうどそのタイミングで今回の産政塾に参加する機会を得た。様々な生き方をする人間に出会い、正直カルチャーショックの連続であり、参加できない会合もあったが参加するのが毎回楽しみであった。私の周りに私と同じように悩み、“殻を破らなければ”と感じている仲間がそこにはいた。

あの少年・青年時代に自分が持っていた“うれしさと悲しさを表現すること”この十数年で心にま

とわりついた殻を今こそ破らねばならない。

〈娘に伝えたいこと〉

そうそう最後に、お前に伝えたいことがある。お母さんがお前を生むとき、分娩室に入るまでお父さんは仕事をしていたね。いよいよだと聞き、病院に駆けつけたけど、分娩室の中から母さんの悲鳴が聞こえてきてね。分娩室に入る前に一言『頑張れ』と言おうと思ってただけ伝えられなかった。出産直後の女性がこの世で一番美しいと聞いたことがあったけど、お前を抱いて出てきたお母さんを見て、本当だなと思ったよ。お父さんもお母さんもお前が生まれてきて本当にうれしかったんだ。お父さんとお母さんはお前を今まで一生懸命育ててきたんだ。本当に幸せになりなさい。

今日からお前は〇〇君の妻になる。自分で決めた人と一緒になるんだ。二人で一緒に力を合わせて暮らしていきなさい。

それからお前に子供ができたら、お父さんがお前にいつも伝えてきたことを伝えて欲しい。勉強ができなくても良いから人の痛みのわかる人になって欲しい。そしてうれしき、悲しさを素直に表現のできる人間になって欲しい。正直に生きて欲しい。いくつになっても情熱は忘れない人になって欲しい。そう伝えて欲しい。

これまで何度もお前には言ってきたが、お父さんは今から二十数年前に産政塾という塾に通い、迷っていた自分の生き方を学んだ。社会に不合理なことはたくさんある。納得のできないこともたくさんあるだろう。無関心を装うのではなく、一つの事柄に対して何かを感じることでできる人間に

なつて欲しい。"無関心"それが心にまわりつゝいた殻だ。殻はとることが出来る。殻を破つて生きなさい。さあもう式が始まる。いつてらっしゃい。

くちよつと美しすぎるが、こんな未来像を持ち、一人でくすくす笑っている。

雑

談



名古屋鉄道株式会社 運転車両部

船 間 淳 也

〔プロフィール〕

- ふなま じゅんや (33歳)
- 1966年 半田市生まれ
 - 1985年 名古屋鉄道株式会社・知多半田駅
 配属
 - 1986年 神宮前乗務区 車掌
 - 1990年 同 運転士
 - 1997年 運転車両部運転指令

産政塾とはなんぞや？

ある日、上司から「産政塾という集まりがある。人事・組合以外では初めての話で、おまえがその第一号となる。どうだ」と、うまく乗せられ二つ返事。しかしこれまで外部・異業種交流はほとんどしたこともなく、「自分がその中にうまく溶け込めるであらうか、口下手な自分が討論などできるのか、」などと思いましたが、飲む機会もあるということ、「まあ、こちらの方で挽回できるか」という、とんでもなく不謹慎な結論で参加を決めた。丹羽さん、こんな私でごめんなさい。

暁学園と子育て論？

第二回の会合で暁学園を訪ねた。講師の祖父江氏から、自分の中では今までドラマの中の話でしかなかった、幼児虐待の現実を知った。世の中には鬼畜外道な大人（親とは呼ばない）がいるものだと思ったが、話の中で、「子供が自分の感情を押さえ切れずパニックになった時は、ぎゅっと抱きしめて、その子の気持ちをすべて受け入れる」というものがあつた。

さて、これを自分に当てはめてみよう。自分が子供のとき（物心ついてから）こんな経験はない。今、自分の親に、なぜしなかったのかなどと聞いたところで鼻で笑われるのが関の山だ。では今、自分には小学校の息子がいる。学園の子供のように激しい気性ではないが、それでも反発したりすねたりする。このような時こちらも突き放す事が多く、子供を抱きしめたりはしない、そんな発想はない。何故か。

それは抱きしめられたときの子供の感情を知らない。いや、考えないからである。大人になって、いろいろな不満を感情で表わす事が非常に少なくなったこともあるが、今子供の頃の気持ちに戻れといわれても、簡単そうに思えて結構難しい。親として失格に近い。しかし気を取り直して考えてみると、自分よりも大きな存在に認めてもらい、心を預ける事によって、確かに穏やかな気持ちになるような気がする。

子供の気持ちになって考える。今まであまり深く考えたことがなかったが、最近子どもを叱る度に頭の中でうずまいてくる。小さい頃、叱られた時、または思うようにならない時にすねたりする。このようなときたいい親から突き放されるか、態度を悪化させればまた怒られた。この時、自分の気持ちの中では、すね続けることによって、親のほうが折れるか、甘い言葉が返ってこないかなどという思いがあったことは確かだ。現実には数こそ非常に少なかったが、後で慰めの言葉がきたこともある。しかし何故か、今度はこちらが態度を硬化させ反発する。子どもがらの一種の報復だったのであるのか、今思うと非常に矛盾していた。

己の感情をコントロールできずに育った子どもが、気持ちを硬化させてしまったとき、これを解きほぐすことの難しさがわかったような気がする。叱ってもなだめても、感情が回り回路のようになつて、自分自身が何をして欲しいのか、わからなくなっているのではなからうか。そんな時、心も体も抱きしめるというあの方法は良いのかもしれない。スキンシップというか、ボディランゲージとか、より大きな安心感を与え、心を開かせる一種の手段かもしれない。自分の息子に、まだ試したことは無いのだが……

車社会への挑戦!!

ご存知の通り、私は鉄道会社に勤めている。今回に限らず産政塾参加者の多くは自動車関連の職種の方が多く、仕事に関していえばライバルのような存在であろうか。

「JRではないのか」と言われる方がいるかもしれない。確かにJRも脅威である。しかし、関東・関西に比べ、鉄道交通網が発達していないこともあるが、この地方は自動車保有率が非常に高く道路も整備され、移動手段のかなりの割合をマイカーが占めている。これはわれわれにとって非常に憂慮すべき現実である。

車の魅力は自分の好きな時に移動ができ、プライベートな空間が確保できるということである。残念ながら公共交通機関にはほとんどそれが無い。自分だって休みの日、タダであるにもかかわらず、電車を使わず車に乗ることが多い。鉄道の利点と言ったら、トラブルさえ無ければ早く、正確に目的地に着けるということぐらいか…

しかし、今「環境」について叫ばれている中、鉄道の良さが見直されてきている。輸送効率で見るエネルギーコストは自動車に比べて話にならない程優れている。自動車技術も向上し、いろいろなエコーカーが造られるようにはなったが、環境・化石燃料の保護について見れば鉄道の比ではない。

だが、いくら環境について叫んでいても、一度快適な自動車の魅力にとりつかれてしまった人達を、鉄道をはじめとする公共交通機関に戻すことは至難の業である。環境問題だけでなく、自動車に対抗する手段は…それはサービスの向上しかないだろう。安全輸送はもちろんの事、お客様が利用しやすい

いダイヤや駅・車両設備・係員のきめ細かな対応などは言うまでも無い。

あと、必要なのは、移動する人たちの意識変革のための時間と努力である。今でもそうだが、先に触れた環境問題に起因して、一昔前からゴミ問題というのがクローズアップされてきた。それ以前はバブルのせいもあったが、多くの人が「ゴミの処理は自分の知らない人達が自分の知らない場所で適当に処分されているのであろう」と考え、どんな物でもポイポイと簡単に捨てており、リサイクルはともかく、分別回収など意識のかけらも無かった人も少なくなかったはずである。これが資源問題だけでなく産廃問題・ゴミ処分場問題など自分達の身近な問題として、マスコミ等により取り上げられたことにより、面倒だった分別回収が今では当たり前のように行われている。同じように、多くの人が環境について関心を持つ事で、車より不便ではあっても、鉄道のような公共機関を利用してもらいたい、ということだ。

だからといって、環境問題に便乗したとしても、人々の意識を変えるのは難しい。ゴミ問題のように、世の中にそのような転機がなければ、鉄道の復権はかなり先になりそうだ。何か妙案はないものか。

当社もいわゆる「エコプロジェクト」のような活動を行っているものの、社内における省エネ・省資材などが中心で、エネルギーコストの優位性についてPRするという社外に対する取り組みは行っているものの、その効果はいまひとつ。駅にはそれらしいポスターがあるにはあるが、人々の意識を変えるには程遠い。大体、鉄道利用者にPRしてもしょうがない、対象はマイカー利用者なのだから…

自動車関連のみなさん、別にケンカを売ってる訳ではありません。悪しからず…

最後に

今回、異業種の交流という触れ込みがあったが職種は違えど、みなさん立派なサラリーマン。異業種交流というよりも、私たちサラリーマン集団と私たちから見ればかなり特殊な（失礼！かなり個人的な）生き方をされている講師の方々との交流のようであり楽しませてもらった。

今後もこの産政塾、続くであろうが、今更ながらこんな方を講師に薦めてみたい。

- ・警察官

- ・寺の住職

- ・プロスポーツ選手（我が社では過去に元プロボクサー・飯田覚士氏を講師に招いた事がある）

- ・医師

- ・元、その筋の人……などなど

第十期の産政塾は終了したが、今後、番外編があるらしい。非常に楽しみである。

大人になるための心得



全トヨタ労働組合連合会

松 田 斉

〔プロフィール〕

まつだ ひとし (39歳)

- 1960年 8月 北海道に生まれる
- 1979年 アラコ㈱入社
- 1994年 労働組合専従
- 1998年 全トヨタ労働組合連合会へ派遣
現在に至る

〈家族〉 妻・長男・次男の4人家族

〈趣味〉 バイク、魚釣り

〈幼稚園中退〉

通い始めて一年を過ぎた頃、とくに虐められた記憶もないが幼稚園の窓から脱走し、家に帰ること数十回、脱走の常習犯となり、保母さんに押え込まれても手を振りほどいて脱走し、とうとう中途退園になってしまった。小学校へ入学するまでの一年半、祖母が私の面倒を見てくれることになった。

何もすることが無いので祖母の行商（リヤカーを引いて野菜を売り歩く商売）と一緒に付いていき、町中（人口四千人の小さな町）リヤカーを引いて廻り、ナスやトマト、大根などを買ってくれそうなお家に上がり込んで、十五分位話しをして買ってもらう。

次の家にたどり着くとまた、同じように話し込み買ってもらう、実にのんびりとした商売である。（のんびりとした性格は、その時に形成されたようだ）

結局、朝の七時から午後三時頃までに売りさばき、夕方に畑に行って翌日の野菜を積み込んで帰ってくるのが日課でした。

小学校は何とか、無事脱走することもなく、順調に通い真面目な小学生であった。性格的には目立ちたがり屋なのだが、非常に恥ずかしがり屋ですぐに顔が赤くなり、よく冷やかされていた。特に、女の子にはよく冷やかされた。おかげである時期、女の子が嫌いになってしまった。その反動で今は大好きである。（ほんの冗談です）

〈本題〉

小さい頃の話しはさておいて、本題の（大人に成るための心得）について私見を書きたいと思う。

よく、「今の若いもんは……」と若者を嘆く中年（大人）がいるが、自分はどうなんだ。若い頃は、大人から見ると今の若い者と同じように、今日、明日の楽しいことを考えて過ごしていたんではないかな。皆がそうではないけど。

社会人に成って結婚しても、仕事さえしていれば、あとは家に帰り何をしていても文句は言わせないと、思っていないだろうか。

世の中の女性が強くなったこともあるが、昔の女性はじっと耐え忍んで、男性を大黒柱に奉り、ご主人様と呼んでいたかは定かでないが、従順に務めていた。それが今は、たまの休日に昼寝をしていると、「邪魔だ」とか、「たまには草取りでもやってよ」など、男女平等の名を借りて「家事も平等よ」と、皿洗いまでやらされるような社会になってきている。挙げ句の果てに、「亭主元気で留守がいい」、「朝出して夜また帰る粗大ゴミ」と川柳にまでなってしまうと、世の男は肩身が狭くなる一方である。

女性に言いたい！「働きアリも、疲れる時もある。せめて自分の城では、召し使いになれとは言わないが、いたわりの言葉ぐらい掛けてやってもバチは当たらないだろう。」

男性にも言いたい！「家事・育児は女性の仕事？ たまにはオレがやってやるよの一言がなぜ言えないの。」と、一応差別はできないので双方の言い分を書きました。

夫婦も永くなると、相手の顔色である程度考えていることが分かるようになる。我が家も例に漏れず、言いたいことはどうせ分かるのだからはっきり言う。はっきり言うものだからすぐ喧嘩になってしまう。しかし言いたい事を言う分さっぱりしている。

男性は、自分の性格的な弱点をズバッと言われると、十中八九怒る。特に古いタイプの人間（ガンコ者）は、「俺の弱点を言うな、今更直らないんだ」「おまえに何が分かる」とまでは言わないが、正直な気持ちである。

女性も同じで、気に入らない所は、間違っても言ってはならぬ。そして、お気に入りのところを気が付かないと機嫌を損ねてしまう。日本の男性は、気が付いていても誉めることをしない。しなないと言うより苦手なのである。外国人はそのままストレートに表現し言葉にする。その辺が外国人は女性に優しいと言われる所以かもしれない。

少し話しが横道に外れている気がするが、大人にも色々個性がある事をわかって頂きたい。

今回参政塾に参加し、いろいろな分野の講師の方々から学んだことは、いずれもその道のエキスパートであり、周りの人からも認められている。物事に対する考え方や発想も、人真似ではなく、自分流の考えを秘め、自分の中で大きく培い、目標に向かって進む行動力を持っている。

私も含め、参加した塾生はそんな人間性に魅かれて、感動を味わい、学んだことが多かったのではないかと思う。

私も講師の中で深く影響を受けたと感じたのは、中国の留学生「常兆さん」ではないかと思う。

私たち日本人を前に、あまり日本（日本人）の悪いところを言わなかった様に思うが、古くから伝

えられている「三步下がってついでくる女は、奥床しくかわいい」や、お茶くみや雑用は女性の仕事と思っている男性が多く、いまだに男尊女卑の慣習が残っている。また、目上の人に敬語を使うのも、日本的なのかなとも思っている。

そんなしきたりや風土のなかで育ってきた私たちは、それが当り前であり、違和感をもたずに暮らしている。そこに、日本人を客観的に見ることが出来る人が訪問すると、おかしいところが沢山見えてくる。その善し悪しや、正しいのか間違っているのかは、個人の価値観により違ってくるが、それを当り前とは思わないだろう。

街を歩く茶髪の若者たちも、異様に写るらしくみんなと同じにしないと嫌なのか、それとも良い友人関係を作るには、そこまでしないと出来ないのか色々考えてしまう。若者ばかりでなく中年のサラリーマン達も、仕事が終わっても真っ直ぐに帰らず、付き合いたいと言いながら何軒も飲み歩いている。奥さんが家で待っているのに何故帰らないのか。不思議だらけである。

悪いところばかりでもなく、勤勉さや誠実さ、協調性や責任感の強さなど良いところも沢山あるのだが、当の本人は俺の良いところとは思っておらず、あたりまえと思っている。

常さんは、日本を「愛しくて不可解な国」と表現しているが、ある意味で納得する表現だなと感じている。今回、「外の世界は素敵よ」というテーマでいろいろお話を聞かせて頂いた中に、外へ出て始めて発見することが多く、嫌なこともあるが、それ以上の発見や感動があり、素敵な世界が広がっていて、私たちに「外へ出てみなさいよ」と言っている様に感じました。

今回産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」は、皆と同じ姿・行動をとることに安心するの

ではなく、どっぷりと日本の風土に漬かった自分を、もう一度見つめ直し勇気を持って行動すること、「あたりまえの殻を破ること」であり、自分を客観的に見て存在価値を高めていくことなのだと感じています。

そこで、良かれ、悪かれ色々な経験をして、見方・考え方に幅を持った、また、現在も絶えず目標を持ち続ける事が、私が思う「大人に成るための心得」かなと思います。

大人といっても、まだまだ成長過程にあり、肉体は三十歳頃から衰えを感じてくるが、衰えを感じつつも、未来に想いを持って前向きに考え行動していきたい。

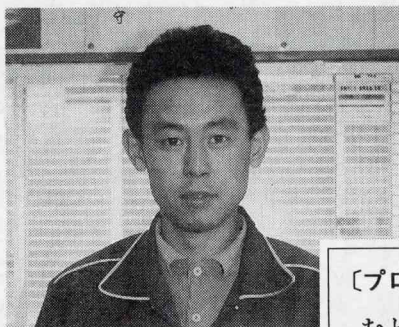
〈おわりに〉

第十期生としてこの産政塾に参加できたことは、異業種の塾生とのふれあいの中で、それぞれ講師の方と向き合い真剣な眼差しで語り合うことが出来、貴重な体験であった。

講演後の懇親会でも、自然体でお互いに接し、良い関係が出来たと思います。

最後に、中部産政研の丹羽さんを初め、講師の皆さんに感謝するとともに、塾生のみなさんとの再会を楽しみにしています。

『殻の外』へ



豊田合成株式会社

武 藤 成 洋

〔プロフィール〕

むとう しげひろ (37歳)

• 1962年 愛知県 生まれ

• 1981年 豊田合成株式会社 入社

〈家族〉 妻、長男 (12歳)、次男 (9歳)

〈趣味〉 サッカー、ゴルフ、スキー、麻雀

数年前のことですが、ある人から「あなたの人生目標は何ですか？」と聞かれ「うーん」と頭をかき上げて返事に困ってしまったことがあります。自分の生きる目標など全くといっていい程打ち立てておらず、家庭の事、仕事の事、職場の人間関係の事、会社の人事異動の事など、目の前のちっぽけな利害損得に自分が翻弄されていると思います。

それでも子供の頃（小学四年生の時）は自分の夢や目標は少なからず私にも有り、その一つとしてサッカー選手になる事でした。それも日本ではなくヨーロッパかブラジルでサッカーをする事を夢見ていました。その夢を達するために小学生ながら自分でも考え、まずサッカースクールに入る決意をしました。ところが、現在はJリーグとか、日本がフランスワールドカップ初出場等、サッカー人気が高まっており小学生のサッカースクールやクラブも数多くありますが、当時（二十七・二十八年前）サッカースクールは自分の身近になく、交通手段、環境、金銭面など、親からの反対で断念せざるを得ない結果となりました。しかしそう簡単にはあきらめきれぬ事でもなく、小学五年生と時に「サッカーは中学に入ってからやろう」と決め、それまで同級生や近所の子を集め毎日のようにソフトボールをやり、少しでも体力づくり（本当にそう考えたかは別でただ、勉強より体を動かしていた方が好きだったのでは？…そして今も！）をした。そして中学、高校と毎日のようにサッカーに明けくれ、自分なりに努力した甲斐があつて二つの大学からの誘いもありましたが、体力面、技術面での差があり過ぎることを身を持って知り「サッカー選手」という子供の頃からの夢をあきらめました。

話をもどしますが、今振り返ってみると学生時代から比べ入社当時、入社五年、十年、間もなく入社二十年となりますが、人生目標、夢が遠のき、毎日が「忙しさに流されている」といった感じがし、

子供の頃の夢がしりすぼみになっている……。ドラスティックにしかかも多面的に世の中や企業が変わりはじめている中、今回中部産政研の「産政塾」に参画させてもらい、本当に感動と感銘したことがたくさんありました。

初めは塾という文字が最後に付くので堅苦しく形式的なものなのかという思いが先走り、素直に受け入れることが出来なかったので本音でした。しかしその思いとは裏腹に様々な企画とその中の講師の方々の「物の見方や考え方」のスケールの違い、そして自分自身の人生観を持って生きていくことのすばらしさ、つまり人生を熱く生きている。そして男（女性の方もおられました）のロマンを失っていない、だから活き活きしている。特に印象深かった事は考現学のお話を聞き、実際に前へ出てフィールドワーク（日常観察）してみたこと。ありふれた日常へまなざしを向けた「細部の観察」と数多く集めて比較しそれを繰り返して見歩く。この観察という言葉は製造現場でもある私の職場でも自分自信よく使いますが「視る」目と「観る」目の間違った「みかた」をしていたことを痛感させられました。そして「見歩くのは自分の身体に固着化した観念のウロコを一枚、一枚はぎ落としてゆく作業かもしれない」この言葉も印象深く残っております。

さて、今の自分自身を素直に見つめ直して見ると産政塾のテーマでもある「殻の外へ踏み出そう」どころか、殻を破れない様、内側から補強しているような気がします。身近かな例で言いますと今書いているこの原稿そのもので「そのうちに書こう」「もう少し暇になったら」という自分自身に対して期限が決っていないこと（事務局の方々に迷惑をかけているかも……）そんなことで人生設計なんて夢のまた夢である。

よく聞く話ですが刑務所の服役者の中から芸術的価値の高い作品が創作されることが少なくないそうで、これらの作品は圧倒的に死刑囚のものが多くそうです。死刑執行官がいつくるかわからない死刑囚にとって刻一刻がなにもにも代えがたい貴重な時間であり、その限られた人生に、「俺は生きているんだ」という実感を覚えるところにそういう作品の芽生えがあると言われています。会社でもまた、家庭の中でも「そのうちにやる」「できるだけ早くやる」という言葉を取っている自分の期限を決めてないことがスロー体質と協道に逃げる意思力の弱さを誘発している。そこで殻破りと人生目標に対する一つ目のテーマは「期間のない願いごとは目標ではない」としたい。

二つ目のテーマは『願いごと』がなければ前に進めないのも、もう一度夢を具体化すること。

子供の頃にいろいろな夢を描いたが、どうして自分自身の夢をいつしか失ってしまうのだろうか？これは、たまたまそうなってしまうものではないと思う……。

最後となりましたが、中部産政研の丹羽さん、第10期産政塾の皆さんには、大変お世話になりました。塾での経験を公私に生かし、自分自身の器を大きくしていきたいと思います。

本当に有難うございました。

「チェンジ」



トヨタ自動車労働組合

安田 幸治

〔プロフィール〕

やすだ こうじ (37歳)

- 1962年 名古屋市生まれ
- 1980年 トヨタ自動車㈱ 入社
元町工場 車体部 第一ボデー課
配属
- 1997年 労働組合専従 現在に至る
- 〈家族〉 妻、長女12歳、長男8歳
- 〈趣味〉 釣り（現在はイカダ釣り）
スキー、野球（現在は観戦が主）

皆さんこんにちは、産政塾十期生の仕上げとして何を書こうか迷っている時、私にとってビッグニュースが飛び込んできた。今、そのニュースをネタにペンを運んでいるが、いつ終わるかわからない。……

私は名古屋生まれ、父は大のドラキチ、そんな父の影響もありいつしか私もドラゴンズを愛するようになった。少年中日ドラゴンズに所属し、イベントに参加したり何度も球場に足を運んだ記憶がある。とにかく野球が大好きで勉強よりも野球をしていた時間の方が長かった。一九七四年、私が十二歳の時だ。二十年ぶりの優勝をかけた試合が中日球場（現ナゴヤ球場）で大洋ホエールズ（現横浜ベイスターズ）を向かえ、ダブルヘッダーで試合が行われた。私は、今でもあの日の事を鮮明に覚えていて。当日券を購入するために朝早く家を出発し目的地を目指した。友達と何の話をしながら球場まで行ったのかは良く覚えていないが一つだけ、優勝した時のために紙ふぶきを用意しようと途中で折り紙を買い、試合が始まるまでに用意をした覚えがある。当時、実家は自転車でもいける距離であった。

外野席のチケット売り場はすでに長蛇の列、「すっげえ人だなあ　こりゃいかんわあ……」と言いながら最後尾につく、とても長い一日であったような気がする。回りの人はすべてドラゴンズファンである。今日優勝することを信じその瞬間を待ちわびている人達ばかりである。私たちも同様「ワクワク」「ドキドキ」何か落ち着かない気持ちである。

一試合目はドラゴンズが快勝、次の試合で勝利を収めれば優勝。しかし先発は現監督の星野仙一さんだったと思うが（間違っていたらゴメンネ。）でも最後にマウンドに立っていたのは、間違いな

く星野仙一さんである。九回裏二アウト球場全体が異常な雰囲気包まれ二十年ぶりの快挙を今か今かと待ちわびている感じだ。私はもうあの紙ふぶきをまいていた気がする。当時三塁手だった島谷選手グラブに打球は吸い込まれていった「やった」「やった」「やった」与那嶺監督が何度も宙に舞いあがっている。興奮のあまりグラウンドに降りていたのだ。冷静に考えると球場関係者にはかなりの迷惑をかけていたのだろう。深く反省しております。「ファンの皆さん、これからは今年（'99）のようない出来事が何度も実現するでしょう。ドラゴンズファンとして恥ずかしくない行動を取りましよう。」

昨日、仕事を終え家に戻ってみると家族全員がテレビの前にかじりついているではないか。十二歳の長女、八歳の長男はメガホンを持って球場さながらの応援を繰り広げているではないか。いつもなら寝ている時間だ！私は父の影響でいつしかドラゴンズを愛するようになったが、この子達も私の影響でドラゴンズを愛するようになったのだろう。あの時私が興奮していたようにこの子達も興奮している。今日の勝利を信じ結果を確認するまで寝ようとしな。強い時も、弱い時も応援するだろうか？ 私が応援すればこの子達も応援しているだろう。親が子供に与える影響は、大変大きなものがあると改めて感じさせられた。

この子達の長所、得意なところをいかに把握し、それをいかに伸ばしてあげるかは私の義務であり、責任なのだろう。私の夢はプロ野球選手になること、少年時代は野球づけ、甲子園を目指しプロ野球選手になりたいと思いつづけていた。しかし現実とのギャップを感じながら現在に至るわけだが、スポーツを通じて貴重な体験もし、すばらしいものを得たと思っている。子供をプロ選手にする気はな

いながらも野球をやらせたい。野球がだめならスポーツを何でもいからやらせたい。この子達の人生を強要するつもりはなくてもどこかでレールを描き、そのレールに乗せようとしているのかもしれない。長女はもう十二歳、来年中学生だ。子供に「将来何になりたい」「どんな仕事をしたい」とう問い掛けても、おそらく具体的には出てこないだろう。夢はあっても真剣にそれに向かっているとは思えない。私もそうだったがほとんどの人が進学、就職で選択をし、自らの道を歩んでいるのだろう。強要し、強制的にレールに乗せる事は出来ないが、選択する際のアドバイスはできるだろうし、必要だろう。自分の持つ実力と希望とのギャップをどう埋めるか、努力しかない。努力をしなければ選択の幅は広がらない、それが分かっていたら、いや実行していれば私もサラリーマンになっていたかもしれない。大変難しい問題である。まあ子供達の特徴を引き出し伸びる環境を作ってあげることが大切だろう。選択の際も子供の立場になって総合的に判断し、子供たちに選択する力をつけさせる事も親の義務だろう。

星野監督の目標は「チェンジ」これは野球を変え、自分も変わる。何かを変えようとする際、管理監督者が言うだけでは「チェンジ」は不可能。自分自らが変わり、変わる環境を作り上げないと結果は出ない。前段で親の影響にスポットをあて自らを振り返ったが、上司が部下に与える影響も大変大きなものがあると思う。星野監督の昨年までは、失敗を許さなかった。今年は「失敗した分、取り返せ。」そう選手、コーチに徹底したそうだ。

同じ失敗を何度も繰り返す事は許されまいだろう。しかし、結果を出すために失敗を恐れず果敢にチャレンジしろ。と、いうことではないだろうか。一生懸命プレーしていても結果が出ない事もあ

る。結果がすべてではなく、それまでのプロセスをしっかりと評価し責任は俺が取るといったようなチーム作りをしたのだろう。細かい事はすべて選手、コーチに任せ方向性だけを修正する。現状把握をしつかりしどのように改善すればベストか、防衛率リーグNo.1、盗塁リーグNo.2、完全にチームカラーを変えて全員で今回の優勝を勝ち取ったと言えよう。

チームのリーダーが自ら「チェンジ」して目標に向かってどう進めるかが、結果を出す大きな手段ではないのだろうか。いくら良い制度を作っても、良いしくみにしても動かす人が「チェンジ」しなければ良い結果は出てこない。また、そのタイミングもしっかり見極めなければならないだろう。

私も職場に復帰すれば一人のリーダーとして数名の部下の管理者となるだろう。どんなリーダーが良いリーダーと言えるのだろうか。それぞれの考え方、性格も違う中ある方向性だけは変える事の出来ない宿命のようなものがある。この方向性についてはしっかりと理解してもらわないとだめだろうトッポダウンだけではなくボトムアップが必要である。さまざまな観点で議論をし、互いに納得しないと物事は目標に向かってうまく進まないであろう。やはりその時代、その場に合った対応が求められてくる。各個人の特徴を見極めうまく引き出し、しっかりとしたコミュニケーションが大切である。今、自分達は何をしなければならぬのか、これからのために何を変えなければならないのか、それぞれを持ち場、立場でしっかりと考えなければならないと思う。

21世紀を目の前にして様々な問題があるが、その問題をしっかりと整理しないまま制度だけを変えようとしている。問題が発生しそれに対処することに追われて、本筋を見失っていないだろうか？。私もえらそうな事は言えないが、これからの日本は決して希望にあふれる時代になるとは思えない。

はつきり言つて将来に対して不安で一杯である。私は、評論家ではないし専門的な勉強をしているわけでもないがまさに今、時代は変わろうとしている。私はこれからの時代についていけるだろうか？意識も変えていかないとおそらくついていけないだろう。「スピード」、「チェンジ」と今まで以上に求められるが、うかうかしていたら必ず置いていかれるだろう。あらためてのこりの人生を考える良い機会でもあったような気がする。まあ、あせりは禁物だ！先ほども述べましたがそれぞれの持ち場、立場で何をしなければならぬか、しっかりと把握し目標に向かって進むしかないのだろう。

家族に対してもしリーダーとしてしっかり守っていく事だろう。将来を見据えて家族全員で計画を立て目標に向かって進むしかない。家庭の中でも職場の中でもリーダーとして自分自ら「チェンジ」をする。リーダーとして大変重要な事であらう。

皆さん大変お疲れ様でした。私も大変疲れました。産政塾十期生の皆さん、丹羽さんをはじめとした事務局の皆さん、本当にありがとうございます。十期生は今後も続けていくことが決まりましたが、またお世話になると思いますのでよろしくお願い致します。

どうもご苦勞様でした。

「青春時代」



フタバ産業株式会社 生産技術部

矢田 勝弘

〔プロフィール〕

やた かつひろ（34歳）

- 1965年 5月30日 豊田市生まれ
- 1984年 フタバ産業株式会社入社
第二製造部 組立二課 配属
- 1989年 生産技術部 生産技術二課に異動
現在に至る

〈家族〉 妻、長女、長男、次男、母

〈趣味〉 スポーツ観戦（テレビで）

パチスロかな

産政塾て何？

産政塾と聞いて何なのかさっぱりわからなかった。『塾』とついでいるので学習塾を想像する人も大勢いるとおもいます。私もその内の一人です。

ある日、課長に呼ばれて『あんだ、いくつになった？』と聞かれ、私はすなおに『三十三です。』と答えそれがそもそもの始まりでした。課長から『ちょうどいいね。』と見せられたのが産政塾の申し込み案内でした。その中に産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう」と書かれていて何のことかわからずただ、私も入社十五年がたち年齢的には、ちょうどあてはまるのかなと思いました。それから後は、『私は、サラリーマン』と言うこと「塾」、「殻の外へ踏み出そう」と言う言葉に引っかけながら参加する事になってしまいました。

第一回産政塾が雪の舞う寒い一月八日（金）にカバハウスで開催された。もちろん私も参加しました。

自己紹介から始まり、今までにやってきた内容の説明がなされその中、「産政塾には何でもあり」と言われ「塾」と言う堅苦しさが失われた気がする。これからが楽しい産政塾になりそうだと思っていた所に、事務局の方から産政塾の嫌われもの話が出された。それが、いま私が苦勞して書いている産政塾誌の原稿である。これが無ければ最高だと思う産政塾、聞いたときはまだ先だと思っていたが私の場合締め切りがもう目前！

がんばったあの時

小学校三年生から剣道を始めた。自分からやりたいと親に言って初めて始めた事だと思う。理由は、友達が始めたことと、時代劇を見ていて『チャンバラ』がカッコいいと思ったからだ。

始めたころは、とてもつらかった。試合を、してもすぐに負けるし叩かれると痛いし今思えばいつやめてもおかしくないなと考える。しかし、私がつづけていったのは、なんだろう。それは、負けることが嫌いで、なんでも一番でないときがすまない所からきている。

四年生になり初めて、豊田市の大会に出場することになった。団体戦とは違いトーナメント方式の為一回負けるとそこで終わってしまう。あまり期待もされていなかったのに、あれよあれよと準々決勝、準決勝、決勝と駒を進めていった。

決勝戦の相手は、同じ四年生なのに私よりかなり背の高い人で体格の非常にいい人でした。小柄だった私が、誰もが勝てる相手ではないと思ったはずで正直、自分でも勝てないなと思ったのも事実です。でも、試合が始まればそんなことは忘れてしまい、もう一生懸命で不思議と緊張していなかった気がする。

審判の『始め』の合図で試合が始まった。相手が技を仕掛け体当たりしてくる。私は吹き飛ばされ倒れてしまう。小さな私が倒れてばかりいるので応援も私の方が多かったような気がする。三分間の試合時間は、あつという間に過ぎてしまい、三分間の延長戦にはいつてしまった。私も相手も疲れている。

延長戦に入るすこしの間に、先生から、『間合いだ、間合いをとれ』と私に声が掛かった。そうだが、相手の間合いにいるから相手が出てくるのだ。三分間の試合の中では、相手の体当りをどうやって受け止めるかそれしか考えていなかった事に気がついた。

延長戦が始まった、相手の間合いに入らないように間合いを取り、相手の出てくるのをまいった。相手は、リーチがあるのですぐに出てきた。『よし、小手』だ、白旗が三本あがった。『勝った』、先生が私を迎えてくれて『よくがんばった』と声をかけられ嬉しかったことをいまでも思い出す。

ここまでこれた

中学に入学しても迷わず剣道部に入部した。小学校から一緒にやっていた友達も同じく入部しこれから、楽しい剣道部になりそうだ。

中学の部活動ともなると今までの週2回の練習とは違い毎日、毎日が練習でとてもつらい日々でした。普通1年生は、防具を付けて練習させてもらえないのですが私は二、三年と一緒に練習をしました。こうなると、出てくるのが『一年生のくせに生意気だ』と言われいじめられることです。いじめられてやめていった子もいますが私は、そんなことではへこたれません。逆にそれをばねにして練習し一年の秋の新人戦でレギュラーになり二年生の先輩をやっつけて豊田市で三位なったのです。『どんなもんだ、いつでも相手になってやる。』そんな感じでいたような気がする。しかし、どこへいっても年下の者が年上の人を越えるといい事はいわれない。質上げでもそうだが、いくら業績が良くても親会社より多くの質上げはできないし、親会社の顔色ばかりうかがっている。

“出るくぎは打たれる”昔の人はいい事を言ったものだ。

三年生になり主将を命ぜられた。一番上の学年になり部活の一番上（主将）となると見晴らしがかなりいい。自分の思うような練習ができるし、何より気を使う先輩がいなくなったことが嬉しかった。それから、中学最後の大会、市内大会に向けて練習に明け暮れた。

夏の大会（市内大会）が始まった。私達の中学（上郷中学）は、自慢ではないが優勝候補にあがっていた。一年生から試合に出ていたせいか、なぜか、緊張はしなかった。

まずは、予選のリーグ戦は四チーム総当りで上位二チームが決勝トーナメントに進出となる。私達は、順調に勝ちあがり予選一位で通過、決勝トーナメントに進出をはたした。決勝でも、順当に勝ち上がり、なんと上郷中Bと当ることになり同じ中学同士の決勝戦となった。結果は、私達Aチームの優勝で上位二チームに与えられる西三大会の出場権を私達中学が得ることができた。

ここまでは、先輩たちでもして来た事で、これより先に進むのが難しい。これまでに豊田市の中学で西三大会で一度も入賞したことがないそうで、私達は、それに向けて練習する事になった。（夏休みが少なくなるなという思いもあった）

西三大会の会場に行くときやはり市内大会とは違った。まず驚くのは身長差だ。一八〇センチクラスの間人がごろごろいる。我々チームの平均身長は一六五センチくらいだったのでかなりの小柄なチームだった気がする。

予選のリーグ戦が始まった。これが最後の大会と思うと不思議と気合いが入ってあれよあれよと予選を一位で通過してしまった。『ここまでこれた』

決勝トーナメントも予選の勢いで、ベスト4まで勝ち進んだ。残念ながら準決勝で負けてしまったが、三位決定戦にまわった。『最後の試合だ』という気持ちで試合にのぞみなんと豊田市初の入賞また、県大会出場というおまけまでついてきた。(また、夏休みが：)

ここまでこれたので大満足なのに、県大会でも私達は、実力以上のものが発揮できなんと東海大会出場ということになってしまった。『本当にここまでこれた。』

ここまでこれた事が自分でも信じられないし、なんでここまでこれたのかそれがわからない。自信をもって試合に勝ってきたわけでもない。ただ、自分一人で勝ち得たものではなくチーム全員で勝ち得たもので、チームワークでここまでこれたんだ。

最後 に

何を書いて良いのかわからず、今まで一番充実していたと思われる時代を振り返ってみた。こうしてあのころを書いてみるとあらためて気づいた事、思い出した事もありこの原稿を書いてよかったと思った。(書くのは非常につらかった)

さて、産政塾のテーマ『殻の外へ踏み出そう』だが、殻の外に出た時がスタート地点に立った状態だと思う。これから何かをしようと思いいそれをしたときが殻の外に出たことになるのだと思います。産政塾で会った講師の方々は殻の外へ踏み出したのでしょ。

第三回産政塾でお会いした角皆さんの下で働いている若者達(大将、大将の彼女、小松くん)傷だらけになって自分の好きなこと(フリースタイルスキー)に打ち込めることがうらやましく思う。今

の私に何がしたいかと聞かれても答えられないだろう。今の安定した生活を捨てられないし、殻の外へ踏み出すにはタイミングが大変重要だと思う。

今回、産政塾で会った人達の生き方を見て、聞いて、私のこれからの人生にきつとプラスになるだろう。

考える幸福



名古屋大学

常

兆

〔プロフィール〕

じょう ちょう (27歳)

- 1972年 中国天津市生まれ
- 1995年 中国北京国際関係学院卒業
(日本語専攻)
中国天津

- 本田モーター有限公司 入社
- 1998年 中国北京電通广告有限公司 入社
- 同 年 南山大学外国人留学生別科 入学
- 1999年 名古屋大学国際開発研究科 入学
現在に至る

〈家族〉 独身

〈趣味〉 チャット、(人と話をする事)
旅行、助手席でのドライブ

はじめに

大学時代、日本語ビデオの時間に、「シャンデリア」というタイトルの映画を見た。家のローンを返済するため、十年間必死に働いて完済にこぎつけたお父さんは、念願のシャンデリアを購入して、人生の目標がクリアされた途端、ついに心の支えを失ってしまい、体力の限度を感じまもなく死んでしまった、というストーリーだった。「過労死」の典型的なお話である。それが私の日本のサラリーマンに対する「第一印象」であった。

私は、大学卒業後日中合弁企業に入社し、通訳を務めていたが、周りの日本人駐在員や出張者たちの働きぶりを目の当たりにして、その感を一層強めたのであった。残業や深夜業務の連続といった長時間労働と単身赴任生活の精神的ストレスが原因で、過労死にこそ至らなかったものの、体力が著しく消耗していったことは事実であった。しかしながら、彼らはそれなりに適当にやり過ごし、人生を楽しんでいるようにも見えた。どうしてそんなことができるのだろうと思った時、当時の私は、理由が「お金」に秘められているに違いないと考え、乱暴にことを片づけようとしたが、その後自分も来日し、実際に我が身がこの巨大な企業社会の歯車の中におかれてはじめて、お金よりも大きなその権威的な存在に圧倒され、しばらくは立ち直れないほどであった。

ところが、こういう企業社会が常識化し、誰もがこの企業社会の中で昇進を繰り返すことによって幸せを獲得するしかないと思っている社会では、思惑を抱えているのはサラリーマンだけではない。親たちが自分の子供をこういう企業社会で、できるだけ有利なスタートラインに立たせようと、子供

たちを受験戦争に駆り立てる結果、教育問題が深刻化している。子供たちは今や一流企業に入るためには一流大学、そのためには有名私立高校、中学、そのためには……という風に、小学校の低学年から競争を強いられている。私は現在、ある小学二年の日本人の英語家庭教師をしているが、その子は英語の他にも、ピアノやバイオリンなどといった英才教育を受けている。しかし、そんな彼は勉強が大嫌いで、何かの褒美（大抵の場合はアニメが見られることなど）がないと勉強してくれない癖がある。しかも、彼はそのお母さんに、「勉強ができていい大学に入れたら好きなことをさせてあげるわ」と言われた際、なんと「よし、それなら、僕はパチンコがやりたい」と答えたのだった。とても笑えない話である。

「経済の奇跡」とまで呼ばれる戦後日本の高度成長を実現させたのは「日本的経営」だと言われている。その真髄を求めるため大勢の外国人が日本に集まってくる。私もある意味ではそのうちの一人であるが、時期が遅かったため、バブルが崩壊し長引く不況に苦しめられている日本しか見られなかったのである。

不況の日本に出会ってよかった

素人の所見に過ぎないかもしれないが、景気も不景気も「雰囲気」だと私は思う。需要が拡大すると生産も雇用も増え、結果として消費が刺激されるという循環になるが、逆の場合は、好循環が悪循環に逆転してしまう。とりわけ日本のような民族性の単一な国においては、みんなで一斉に何かをしようとする、その勢いがきわめて大きくなり、極端に良い結果も極端に悪い結果もどちらも招きか

ねない。来日して以来、耳にタコができるほど「不況」の話聞かされてきたが、今一度冷静になって、この状況を日本という国の将来と自分自身の人生を見直すチャンスにしてみてもどうかと思っていた。

そんな時に私は産政塾に出会った。モノの豊かさより真の幸せを追い求める塾生の皆さんの姿に私は個性そのものを感じ取った。また、岡本さんご夫妻のユニークなフィールドワークや広瀬さんのすてきなバーへ招いて頂いた際にも、やりたいことはやるといった、講師の方々の真摯な態度に感動した。「不況」にも拘わらず、自らの人生を少しでも幸せにしようとする皆さんの熱意と努力が、この私に元気をくれたのである。

日本症候群

日本への留学や就職ブームもやや落ち着いてきた昨今、一般の中国人にとって、日本で働くということは相変わらず魅力的な出世コースのようである。これは地方の日本人の若者が東京に憧れる感覚とよく似ている。しかしながら、この流れがバブル時代にピークに達してから、今なお後を絶たないものの、中身が変わりつつあることは否定できない。ある組織の中に身を寄せさえすれば、幸せになれるといった時代は今終わろうとしている。バブルの終焉に伴い、中国人が描いた「日本黄金夢」も次第に醒めていったのである。勉強さえできればよい、仕事さえこなせばよいといったアイデアは、日本人の場合はもちろん、在日外国人にとってもはや通用しないものとなり、将来の日本のため日本人と在日外国人とが一緒になって真剣に取り組む、さらにそこから自分たちの有意義な人生を見出

そうとする時代をこれからわれわれが迎えるのではないかと私は感じ、またそう願いたいと思う。

変な外国人

私は「産政塾」でいつの間にか「変な外国人」と呼ばれるようになった。「どこが変なの？」と聞くのも決まりが悪いので、自分で答えを探すことにした。そこで社会人類学者ベフによる「日本人の異文化観」理論が目に残った。

ベフによると、日本人が考える日本人であるか否かの基盤には二種類あり、図のような生物学的要件と文化的要件に別れる。

日本人であるための要件

文化的要件 (考え方など)	生物学的要件(血統)		
	日本人である	日本人である	日本人でない
	日本人でない	A	B
	日本人である	C	D

A：普通の日本人

B：変な外国人

C：変な日本人（帰国子女など）

D：普通の外国人

このうちBのカテゴリに属する人たちは、血統的には日本人ではないが、日本文化を身につけており、「まるで日本人と変わらない」と呼ばれる域にまでは達しうるが、決して日本人(A)から自分たちと同じと思われているのではない。だから「変な」外国人である、というわけである。

そこで「私はいったい何人なのだろうか」という疑問がふと湧いてきた。日本人でないのは無論、中国人らしい中国人ともいえないと思う。これはおそらく日本に長期滞在を経験した多くの外国人にとっても共通の悩みの一つであろう。「自分のアイデンティティを失う」ということになってしまうからだ。

今回の日本留学にあたり、友人達から「国際人としての活躍を祈る」とのメッセージをたくさんもらった。「国際人」という言葉を、当時の私はただ漠然と「外国の文化をよく知り、理解できる人間のことだ」と受けとめたのだが、日本に住みついて半年経った今、考えがまったく逆転してしまったのである。

産政塾の集会で「(日本人に)染まりつつある」と冗談を言われたことがある。何故そうなったのかと考えた時、当時の気持ちがいささか日本的になり、自らの従来の価値観を一切排除して物事を見ていたことに気がついた。つまり相手の立場になってみればその言動がよく理解できるが、だからといって自己の考え方を改める必要もない。中国にいる時当然だと受けとめていたことは必ずしも外国で通用するとは限らない。善し悪しはあくまで自分の基準であり、自分の価値観を相手に押し付けたら、どちらがよいかと選択に頭を痛めたりすることは意味がないと思う。

そこで私はこう考えた。国際人とは自分が中国人であること、また中国人でしかないことを認識で

きる人のことである。いわゆる語学力や外国経験が国際人への条件ではない。それが国際人への近道となることはあるかもしれないが、それだけでは不十分である。中国で生まれ育った私は、何をやるにしても中国文化に縛られていて拘束されているのだと自覚することがより大切である。

自分を規定する文化の性格が理解できれば、外国人を規定する文化の拘束性の理解が容易になる。つまり自分を客観的に見ることによって、自分とは異なるものを正當に評価する気持ちが育っていく。真の国際人はこうしたところから生まれてくるのではなからうか。

産政塾の方々はきっとそんな優しい目で私を見てくださったと思う。もともと「殻を破る」という産政塾のテーマも異なる生き方を評価しようという寛容の心から生まれたのだらう。こうした寛容の心が異文化といったより広い範囲での異質性の受け入れに繋がっていき、そのお陰で、この「変な外国人」は今期の産政塾に乱入させていただけたわけである。

「ドラえもんの最終回」を読んだ思ったこと

少し前まで名古屋工業大学の学生によって書かれた「ドラえもんの最終回」がインターネット上で流され、かなり広い範囲で反響を呼び起こした。「ドラえもん」の大ファンである私は当然のこと興味津々に拝読させてもらった。この「作品」は「ドラえもん」というお話を「ENDLESS」にしたいのではないかと思わせる感じがする。というのは『「ドラえもん」を設計（製作も）したのは、実はのび太くん自身である』というイメージを読む人に抱かせるような気がしたからである（この場合の「ENDLESS」とは、お話がぐるぐる循環して終わりがないこと）。しかし、それよりも「ドラえも

ん」の様に永らく親しまれているキャラクターは、敢えて「最終回」を設定することよりも「マンネリ」と言われようと、いつものメンバーといつものパターンでいつまでも続くスタイルを採るほうが、誰もが幸せでいられるのではないかと思う（この場合の「ENDLESS」は、「終わり」の地点がはるか無限の彼方にあること）。もちろん藤子・F・不二雄先生御自身によっても最終回が書かれていたことは仕方のないことだが。

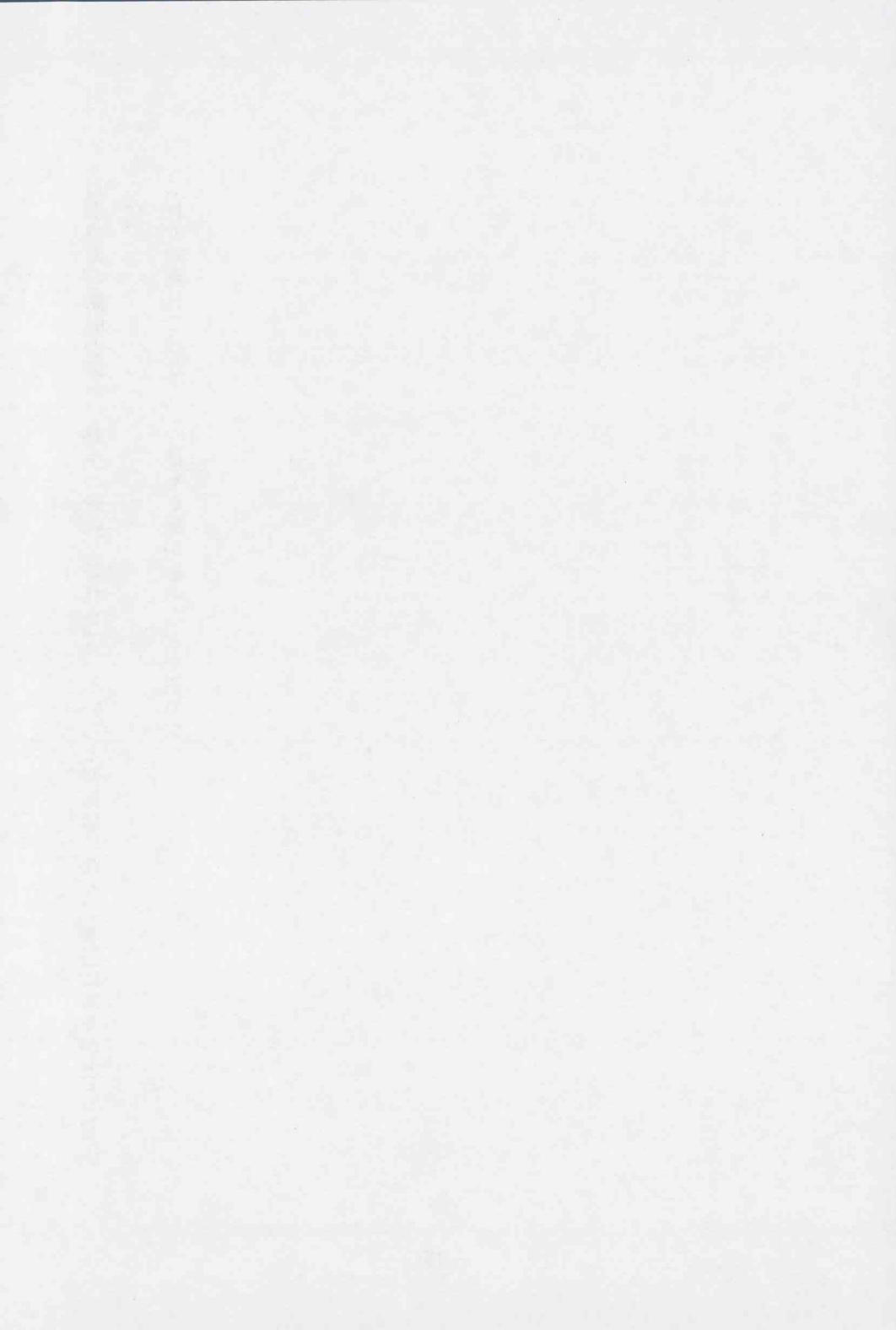
世の中はどんどん動く。価値観は目まぐるしく変化し、人の心も移ろう。そのスピードは日に日に増していき、ある人は疲れある人は自分を見失う。そんな時代の流れの中で変わることなくいつもの世界を見せてくれる、その世界へ招きいれてくれる、そんな風に人をほっと安堵させてくれる数少ないものの一つが、あのドラえもとその周りのキャラクターたちであり、それこそ作者の目指したもののなのかもしれない。その意味では「ミッキーマウス」も「スヌーピー」もまったく同様の存在だと思う。

「ミーハーな日本人高校生と一緒にではないか」と言われそうだが、東京のディズニーランドで21世紀を迎えたいと本気で思う。人生の原点にもう一度立ち戻り、子供のような純粹な気持ちで、これらの人生を正直に歩んでいきたいからである。また、あと半年くらい経ったら一度帰国して、そこで日本と中国について改めて考え直すことも必要かもしれない。

ここまでとりとめのないことを思いつくままに書いてしまった。読みづらかったかもしれないが、これ以上の文章はどうも私には書けそうにないようなので、これで勘弁していただくことにする。ありきたりの言葉を借りるのはなんと口惜しいが、最後に一言言わせていただく。

丹羽さん、講師の方々、塾生の皆様、これまでいろいろとお世話になり、本当にありがとうございます。
ました。

これでお別れではなく、今後もし縁があることを祈りつつ……。



2009年産政塾の20年を振り返って

— 10年後の産政塾 —

中部産政研

丹 羽 研 次

産政塾道場竣工

西暦二〇〇九年秋、待望の産政塾の拠点である「産政塾道場」の完成を迎えた。

愛知県西三河の山間部に、土地面積二〇、九六七㎡、塾舎六、七〇一㎡、宿泊収容能力五十五名、研修機能等が整い、あの松下政経塾を上回る規模の施設である。中部産政研会員各団体からの資金拠出に加えて、産政塾OBをはじめとする賛同者からの寄付により竣工し、今、オープニングのセレモニーを迎えている。

同時に、文部省「生きがい教育プログラム」の認可法人第1号として「教育法人産政塾」が中部産政研より独立し、運営の拠点をこの地に構えることとなった。

会場には、一、〇〇〇名余の卒塾生をはじめ、出資団体の皆様、産政塾講師の皆様、歴代の塾長、スタッフ総勢一、二〇〇名がご出席の下、代表して十期塾長植本俊一氏のご挨拶が続いている。．．．

二十年を振り返って

この秋、第二十期産政塾の「閉塾式」を迎え、通算一、〇〇〇人余の塾生が終塾を迎える事となった。

二十年間の産政塾に関わった諸先輩や講師の皆様方、そして一、〇〇〇名余の塾生の皆様方に改めて感謝申しあげたい。

また、全国からの毎年二〇〇名を超える応募者の中でも、残念ながら入塾できなかった皆様方には、ご期待に添えなかったことをお詫び申し上げます。今回の産政塾道場の設立によって一層の募集拡大を図り対応していくことをお約束しお許しいただきたい。

第一期から十期までの十年間の塾生が一七〇人であったことを思うと、塾生規模は格段の増加である。

運営においても、最初の十年間は、年間七回、半日程度の開催スタイルであったが、十二期から新設した「二週間合宿産政塾」は一層意義深い産政塾へと改革されていった。二週間を缶詰合宿とし、その間は、各団体や家族はもちろんのこと電話やパソコン通信等一切外部からの情報を断ち、産政塾に専念するといったものである。講師の刺激的な生きざまと相俟って効果的な人生シヨック体験となったのである。

二週間合宿産政塾の当初の企画は、合宿拠点に苦勞しながら活動した。といっても、ほとんどは講師を訪ねて出歩くことになる訳だが、この企画の狙いは、企画が終わった後に会社や家庭社会に逆戻りしないことである。塾生にとってこの二週間は全く別世界でのあつという間の期間であった。

活動範囲についても、当時は結構遠方まで出掛けていったつもりであったが、長野県白馬村が一番遠距離であり、県内の日帰り企画が多かった。今期実施した、各地の講師をチェックポイントとした一〇〇円北海道集合企画（注：二〇〇五年のデノミ実施により一〇〇円は当時の一〇、〇〇〇円）は、三十六時間後に全員がたどり着き、トラブルはいろいろあつたが最遠方の企画であった。

来期は海外へトライしようとの計画も検討中である。

二週間合宿産政塾の他にも年間十二回企画の産政塾や二年期間の二十四回コースを合わせて五コースの運営を実施してきた。事務局の混乱もあったが、別のコースの企画に参加したいとの塾生乱入も相次いだ。

まあ許そう。産政塾のテーマは「殻の外に踏み出そう」であるのだから。

いろいろあった産政塾

この二十年間にはいろいろな出来事があった。

産政塾が引き金で会社を退職してしまった塾生が十八名。うち、講師に弟子入りした塾生五名。産政塾講師を務めた塾生二名。中部産政研へ転職した塾生一名。行方不明二名。

派遣企業の社長就任一名（役員多数）。労働組合執行委員長就任九名。市長一名。国会議員三名。地方議員十五名。

塾生同士の結婚三組。産政塾が縁で結婚六組。うち一組は十一期塾生と中部産政研の岡田ゆかり（九期十期の塾生はご存知）の結婚であった。あの時の産政塾には中部産政研のスタッフ乱入もあった。

最年少塾生十八歳。最年長塾生六十六歳。外国人十一名。

産政塾再入塾三回一名。二回八名。（予備軍多数）

「何でももあり」の産政塾精神からまあまあの成果？ である。

産政塾には先見の企画

これまでいろいろな場で何度も繰り返し述べてきたが、中部産政研が設立（一九八八年）され、翌年から実施された産政塾の企画は実に先見の企画であった。時代が経過するとともにその感は一層強くなるばかりである。

運営を携わったものとして、設立に関わった方々とこれまでの運営に携わってきた方々に深く敬意を表したい。また、その勇氣に心より賛辞を贈りたい。

創設の理念は、学力偏重の学校教育と各企業毎の専門教育にはない「人間教育」が必要との発想に基づき、講師の様々な生きざまや参加塾生相互の異業種交流を通じ、柔軟な発想や広い視野を養い自己啓発しようとすることを狙いとして企画された。

何でもあるの異業種交流として様々な生きざまを実践されている講師を訪ね、討論する企画である。

ひとつだけ反省を記すれば

近年の教育の考え方では、同様の条件下では「人間教育」の実施は不可能であることが実証され、行政も学校も企業・労働組合もその必要性は認めながらも放棄してしまった。

講師の生きざまや参加塾生の異業種交流を通じ、柔軟な発想や広い視野を通じて各派遣団体の発展に繋げようとした当初の狙いは、この十年間に大きな方向修正に迫られこととなった。

それは個人としての生き方や成長に繋げようとの転換である。

したがって応募塾生も団体からの派遣の他に個人として自費および休暇を取っての参加者が年々増加している。今期は過半数を超えた。

社会に必要な教育とされた産政塾は、単に企業や労働組合の枠を超えて発展、拡大し社会性を持つものとなったのである。

こういった社会性は当初の予想を超えたものであるが、産政塾の理念や運営には全く方向修正を求められるものではなく問題はなくうれしい誤算である。

産政塾ブームの到来

「食うための生活」、「福祉の充実」、「高度経済成長（欧米に追いつけ追い越せ）」、「経済低迷・不況・雇用問題勃発」の次に訪れたのは「生き方の再発見」ブームであった。

一九九〇年を境に高度経済成長は終焉し、以後十年間はその復活を追求した試行錯誤の時代であった。二〇〇〇年を境にこの十年間に人々の意識は大きく転換していった。

十年前と比較してみよう。

パソコンの普及台数は人口の二倍を超え、携帯電話は二〇〇五年をピークに減少し携帯パソコンへ様変わりしていった。

経済成長は三〇四％の安定維持が続き、今年脚光を浴びたのはサテライトオフィスが進化した無国籍オフィス（ビジネスマンの居住地周辺にフリーオフィスがオープンし、一インチのCDをポケットに入れたビジネスマンがジョギングウェアで通勤するスタイル）である。このシステムはビジネスマ

ンの居住地に大改革をもたらし、土地・住宅問題も大幅に改善された。

一九九〇年代に流行した若者の茶髪や服装のビジュアルファッションはもうすっかり過去のものとなってしまう。ビジュアルの個性ではなくマインドの個性の時代となった。

本物の時代到来である。

時代のトップランナーとして役割を果たしてきた産政塾に対して、今後の期待は一層大きく熱い。

おわりに

オープニングセレモニーでは、植本氏の産政塾を自慢する挨拶が続いている。片隅では、初代塾長の梅村志郎氏が「産政塾は外に出て講師を訪ねることが大切。道場へ講師を招いては駄目だ。」と相変わらず手厳しい。二代目塾長の足達廣紀氏は、遠路アメリカから駆けつけていただき烏龍茶を片手にここにこと談笑されている。

私は、歴代の事務局としてお招きをいただき十期塾生を始めとして携わった四期間の塾生と十年ぶりの再会を楽しんでいる。

間違っても、舞台袖で司会進行をしているのは私ではありません。

產政塾活動記錄

《第1回会合》

日時：1999年1月8日(金)

場所：カバハウス・ツインピークス

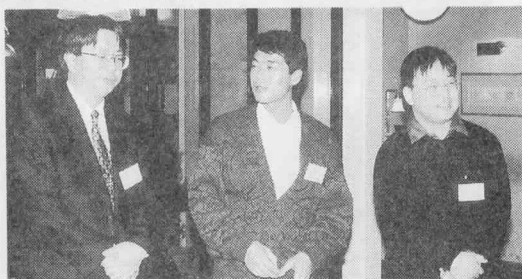
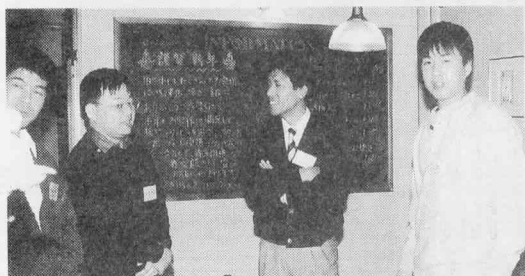
内容：開塾式

塾長植本俊一と討論「殻の外へ踏み出そう」

自己紹介・今年の目標・最近腹の立ったこと、交流会



第10期に集まった20名の塾生



全員が初対面の20名でありましたが、懇親会では打ち解けて話題がつきませんでした

《第2回会合》

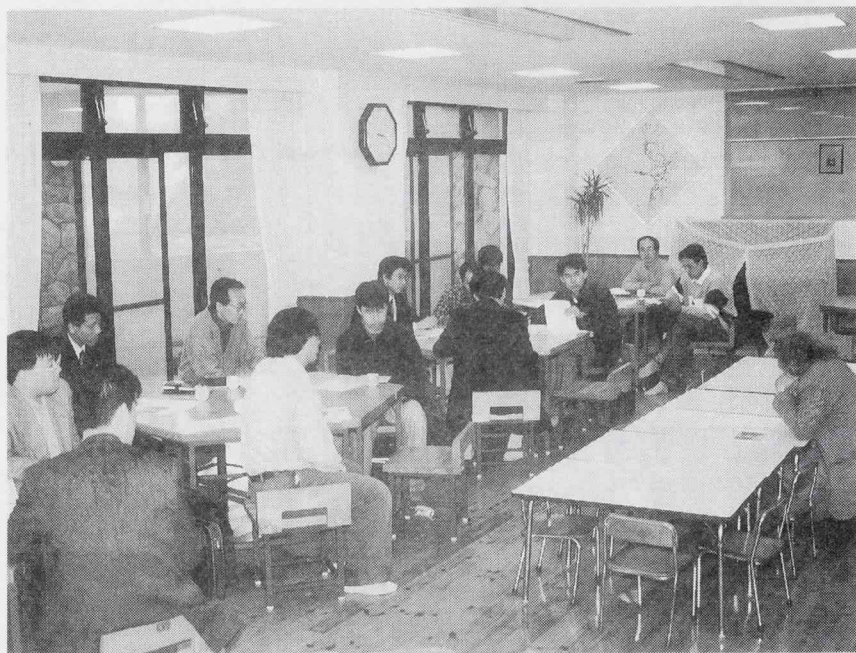
日時：1999年3月26日(金)

場所：養護施設「暁学園」東海市

内容：園長祖父江文宏氏を訪ねて

「子どもの虐待問題と施設の運営」

施設運営の見聞・討論・懇親会



養護施設「暁学園」を訪ねて子どもの虐待問題を討論する塾生

晩学園園長
「祖父江文宏氏」



真剣に聞き入る塾生

懇親会では
祖父江氏の生き方を討論



懇親を終えて写真撮影

《第3回会合》

日時：1999年4月25日(日)～26日(月)

場所：長野県白馬村

内容：フリースタイルスキーヤー「角皆優人氏」を訪ねて

「フリースタイルスキーと角皆氏の人生」

元全日本ナショナルコー角皆氏とスキーに関して討論・懇親会



一部に雪が残る白馬へ出掛け角皆氏や
オリンピックを目指すインストラクターと交流

野外にて角皆氏と討論



懇親会ではインストラクターの皆さんと討論



《第4回会合》

日時：1999年5月27日(木)

場所：名古屋市内（シャンプホテル）

内容：中国からの留学生「常兆氏」を囲んで

「外の世界は素敵よ！」

講演と討論、懇親会



「日本人は誠実でうそつき」の話に苦笑する塾生

講師の「常兆氏」



懇親会では二次会まで
大いに盛り上がりました



《第5回会合》

日時：1999年7月14日(水)

場所：名古屋市内（大須・栄）

内容：野外活動研究会主宰「岡本信也・靖子」夫妻を訪ねて

「実践フィールドワーク」（大須・栄編）

万物観察の実践・発表・討論会、懇親会

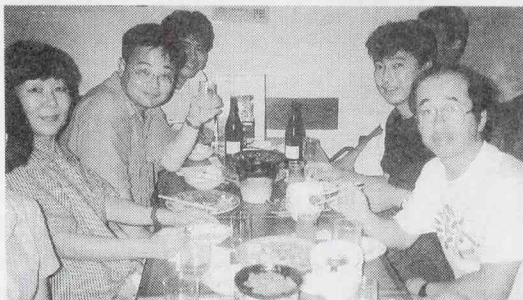
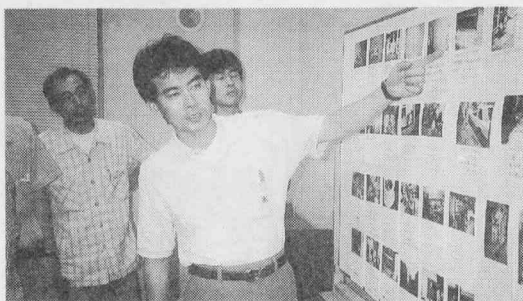


大須にてフィールドワークの説明を受ける塾生

商店街を観察する塾生
この後は各自で写真を撮り
持ち寄りました



各自の成果を発表する塾生



暑さと雷雨の大変な一日
でしたが懇親会で元気回復

《第6回会合》

日時：1999年8月12日(月)

場所：足助町

内容：ライブカフェ足助のかじやさん「広瀬明史氏」を訪ねて
170年余の伝統を継ぐ鍛冶師とシンガーソングライターの人生
鍛冶の見聞、ライブ鑑賞、討論、懇親会



三州足助屋敷の加治屋さんにて実際の作業を見聞

物づくりについて意見が集中



ライブハウス
(鍛冶屋の2階)
では特別に歌も披露

鍛冶屋を継ぐ決意を
興味深く聞き入る塾生



《第7回会合》

日時：1999年9月17日(金)～18日(土)

場所：全トヨタ労連つどいの丘

内容：閉塾式

討論会「百万円を分けよう」他

産政塾の感想、懇親会



10期最後のスナップ写真です。開塾の写真と見比べてください。

塾生相互の討論会を企画



打ち上げはバーベキューで
盛り上がりました



産 政 塾

2000年 5月31日 第1刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471-0833

愛知県豊田市山之手 8丁目131番地

愛知労済豊田会館 3F

TEL 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

塾 政 産

塾 長 植本 俊一

塾 生

アイシン 労組	石川 輝彦
トヨタ車体(株)	奥田 竜太郎
(株) デンソー	糟谷 道広
松坂屋 労組	門 孝裕
中部電力(株)	川上 茂浩
アイシン精機(株)	小坂 好伸
豊田市役所	近藤 理史
日本特殊陶業(株)	杉本 道男
トヨタ車体(株)	鈴木 亨
アラコ(株)	鈴木 康紀
デンソー労働組合	高橋 勝将
トヨタ自動車(株)	丹下 隆吉
アスモ(株)	徳増 達生
(株) 東海銀行	戸田 覚
丸栄 労組	西井 俊哉
名古屋鉄道(株)	船間 淳也
全トヨタ労連	松田 斉
豊田合成(株)	武藤 成洋
トヨタ自動車労組	安田 幸治
フタバ産業(株)	矢田 勝弘
名古屋大学	常 兆

中部産政研 丹羽 研次